

倒的に多い南東壁を上とする見方に基づく。結果、縦は小2.7m（1棟）、中3.6～4.5m（5棟）、大5.1～5.7m（3棟）、特大6.6m（1棟）。同じく横は、極小1.8m（1棟）、小2.7～3.0m（3棟）、中4.2～5.1m（8棟）、大5.4～6.3m（5棟）、特大6.9m（1棟）。分化は縦が明確である。横は漸移的だが、4.8mと5.7m付近に集中があり、両者の中间を中心とする境とした。横で極小となるものは、溝の疑いがあり例外的である。床面積は、小9m²、中19m²、大30m²、特大45m²前後と見込まれ、各規模の差は1.5倍～2倍程度となる。上記の割合は、中が高く、大もやや高いが、後述する段階別では、古段階に大は無く、中段階にのみ特大が存在、新段階に小は無い。規模の拡張は、SI18が比較的明瞭。SI15も外周溝の特徴からすると可能性が高い。同一地点における重複の多さからは、改築時、土地利用に一定の制約があったように見受けられる。

堅穴部主軸：①N-130°-E、②N-140°-E、③N-150°-Eの3種を示す傾向にある。重複関係が明確な例を整理すると、新旧は①→②→③ないし①→③の順となる。この点は、集落変遷の項で詳述する。

堅穴部柱穴配置：主柱は1辺約4m前後を境に増加、5m以上は高確率で備わる。礎石+白色粘土と推測される例（SI05・08・17）、あるいは壁溝内の柱穴（壁柱や隅柱）のように不明瞭かつ調査者による記録方法の差が反映され易い例は、明確な区分や位置付けが困難である。柱穴形状は、円形と方形基調の2種存在する。

カマド：14棟の堅穴建物内において15基確認した。基本的に、建物南東壁際の右側に位置する。右から左への造り替えが1例ある（SI17）。いずれも半地下式。本体は白色系粘土を主体的に用いて造られたと推定されるが、袖部のみが残存する傾向にある。煙道部は、長（SI03・06・12・24・25）、短（SI05・08・10・11・15・17・18・21・22）あり、前者は小型で深い建物、後者は大型で浅い建物が多い傾向がある。前者の先端部底面には、Pit状の凹みが設けられている例もある（SI03・06）。支脚は3遺構に遺存し、1基（SI06・08）ないし2基（SI03）となっている。袖部の焚口付近に倒立した土師器壺の設置例（SI03）がある。全てのカマドは、最終的に人為的破壊を受けた可能性が高く、破壊されたカマドの脇に土器が供献された例（SI03・10）、更にのち建物が焼失した例（SI10）も存在する。

壁溝：1辺約3m以下は、高確率で不明瞭もしくは存在しない。

内部施設：張出部・内土坑・出入口が認められる。張出部は4例（SI04・05・10・18）に存在。規模は、縦150・180・210cm、横60・120cm程度である。一辺約4m以上の建物にみられ、建物規模に対する張出部の長さの割合は、縦は3分の1前後にまとまる特徴があるのにに対し、横は4分の1～10分の1程度と差がある。よって、縦の長さに規則性が強い。大型の内土坑は4例（SI03・06・21・22）あり、カマド脇中央付近（SI06・21）とカマドと対反側の壁際（SI03・22）に設けられる。遺物の良好な出土事例は2例（SI03・22）。出入口が明確な事例は1例（SI05）あり、カマドと同じ南東壁際の左側にスロープ状に備わる。

掘立部：平面形状は方形ないし長方形であり、堅穴部にあわせて張出部が設けられた例（SI10）も存在する。1×2間・2×1間・2×2間が主で2×2間がやや多いと思われる。軸方向は堅穴部と同じ北西-南東方向。平面規模は、堅穴建物同様、南東-北西を縦、南西-北東を横として測定した場合、縦は3.6・4.2・4.8m（4.2mに集中）、横は3.9・4.2・4.5・4.8m（4.2mに集中）。床面積は、18m²程度。柱穴は円形基調が主、方形基調も存在、径は30～40cm程度。柱痕は径20cm程度が多く、覆土中

や底面にその痕跡が残る。掘立部の付随は、竪穴部規模が1辺約4mを境に増加、5m以上は高確率で伴う。

外周溝：1棟の竪穴部および掘立部を開むようにして設けた例が主流だが、数棟の建物を開むと想定される例(SI23)も存在する。前者の平面形状はコの字ないしC字状を呈し、竪穴部のカマドや掘立部が設けられる南東方向が開口する。掘り込みが深く明瞭で途切れない例(SII5・18・23)、掘り込みが浅く途切れ気味の例(SI05・08・26)があり、確認面の高低差があるにせよ、この2種類に細別される。竪穴部と外周溝の距離・間隔は、2m台程度が一般的である。外周溝は、竪穴部の規模が1辺約4m以上に付随する傾向にあるが、時期・段階により有無の基準が異なる可能性がある(後述)。

建物の廃絶：人為堆積の割合が非常に高く、黄褐色土以下の土・土器破片・焼土粒・炭化物等が混入する傾向にある。焼失は4棟(SI02・03・10・22)。いずれも炭化物・焼土層が床面付近に形成されている状況から、廃絶初期に焼失した様子を示す。なお、遺構確認面や覆土の残存状況が不良につき、堆積状況の把握が困難だった事例も幾つかある(SI05外周溝・SI12・SI17・SI24)。焼失ないし人為的埋め戻しの際、床面や内部施設内に残存度の高い遺物が残された例が幾つかある(SI03・10・21・22)。

b. 堀跡

4基確認。平安時代の建物跡や溝と調和的に並ぶ柱穴や溝を堀跡として抽出されたが、類似遺構は溝(SD)の中にも存在する(後述)。形態は様々だが、単なる柱穴列のほか、これに溝状の掘り込みを伴うものに大別される。機能・性格は、集落内部を大きく区画する施設(SA01・04)、隣り合う建物跡間等の区画ないし特定の建物の付帯施設(SA02・03)に区分される。

c. 掘立柱建物跡

4棟確認。形状は各々異なる。軸方向が平安時代の竪穴建物・堀跡・溝等と調和的な3例(SB01・03・04)は、B-Tm降下以後の構築・廃絶と推定。このうちSB01は、柱穴規模が他の掘立柱建物よりも明らかに大きく、特殊な感がある。他方、平安時代の遺構群と主軸方向が異なる事例(SB02)は具体的時期不明。

d. 溝跡

25条確認。大多数が竪穴建物跡等と調和的位置関係を示す。一部がB-Tm降下以前の構築・廃絶(SD14・21)、他がB-Tm降下以後の構築・廃絶と推定。いずれも滯水・流水を示す証拠は明確ではない。以下、想定される機能・性格ごとにまとめる。

a類 集落外縁を区画する大溝および付帯施設 2条 (SD10・30) ※1

b類 集落内部の区画施設 16条 (SD01・02・07・14・16・17・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29) ※2

c類 竪穴建物跡付随の外周溝、ないし集落内部の小区画施設 8条 (SD01・03・11・14・17・19・21・31) ※3

d類 竪穴遺構内部から外部へ延びる施設 1条 (SD04)

e類 不明および分類不能 2条 (SD09・13) (遺構数25。SD01・14・17・21は複数該当)

a類：集落内外の境に築かれた大溝。外土塁の存在をうかがわせる点もあるが不明。幾度かの改築により、幅・深さ・条数(1→2→1条)が変化する。b類のSD16・29との重複関係は、集落景観・変遷を考える上で重要である。分岐する溝(SD30)は、隣接地の沢へ向かっており、水量増加時に備えた排水溝のようにもみえる。

b類：①比較的規模が大きく集落内部の大区画施設(SD07・14・16・25・29)、②それ以下の小規模

区画施設に細別される。①は、複数の建物単位を区分するなど、集落内施設の主軸方向や土地区分ひいては集落の景観形成に重要な役割を果たしていたとみられる。状況・段階により、特に壙跡の一部(SA01・04)とともに大溝(ア類)と関連あるいは接続していたと推定する。

c類: e類よりも外周溝に類似する。一部、不確定要素もあり、SD03とSD11は遺構密度の低い場所に位置し、円形周溝との類似性も見受けられるなど、更なる検討を要する。

d類: 外延溝などと称される施設。SI06に伴う可能性大。上野遺跡や周辺遺跡に類例が散見される。

e類: 溝とされたが、断片的かつ詳細不明。竪穴建物跡等、別種の遺構となる可能性も高い。

特徴的な遺物出土例として、SD03堆積土出土の土師器内黒窯(鉢形)、SD10c(最古段階)底面付近(底面上約2cm)の一定範囲にまとまっていた坏4点、SD11北西隅底面の一定範囲内に倒立ないし正立してまとまる土器底部等、SD19堆積土中(底面より40cm前後上)の一定範囲内にまとまっていた土師器、SD21内に層状堆積するB-Tm下層出土の土師器(本報告最古と推定)、SD31埋没過程中(土坑状の掘り直し部分)から出土した土器・精鍊炉を挙げておく。

*1 SD10は集落外縁を走る大溝。SD30はSD10から分岐する小規模な溝で、調査区西側の沢源へ延びる。

*2 SD14・21:B-Tm降下以前、SD21とSA04(原跡)はB-Tm降下以後の構築・廃絶である。ともに形状が類似する組み合わせであり、調査区外において各々同一化する可能性もある。また前者SD14と後者SA04の重複範囲が多く、両者の高い関連性をうかがわせる。恐らく、前者から後者へ改築・増設等があったと推定する。SD16・29: 積層・形状・重複範囲が良く似る。別の名称とされたが、ほぼ同一の目的により設けられた施設と推定。SD29構築→北東側先端部の人為的に埋め戻し→SD10・構築・SD16構築、の変遷が考えられる。最終的にはSD10eとSD16は直結せず、双方の間は通路状となっていた可能性がある。ちなみに、SD29とSD10の直結も想定はされるものの、判断材料を欠く。SD17・21: 平面の輪方向や位置関係から、SB04、ひいてはその北側に存在が予測される堅穴建物跡に付随する外周溝の一部として、調査区外において同一化する可能性も挙げられる。但し、B-Tmの堆積状況や重複関係が整合せず、疑問も残る。SD22・23: 比較的近接し、輪方向が一致する。

*3 SD01・31: 位置関係より、関連性が強いと想定。調査区外南東側に建物等の存在も予測される。SD02との関連性も考慮される。SD03・11: ともに内部に建物跡が存在しない。SD19: 建物跡の外周溝に類似する。その場合、規模が大きく、複数の建物に付随する可能性が指摘される。

e. 土坑

34基確認。B-Tm降下以前の1例(SK59)を除き、他はB-Tm降下以後の構築・廃絶と推定。但し、明確な出土遺物を伴わない例が多く、具体的な時期は不明。遺構規模・形状は多種多様な感があり、他の大型遺構に比べ遺存状態および記録方法の差が表れているように思われるが、傾向として大型ほど形状明瞭で深く人為堆積の割合が高いのに対し、小型になるほどその逆となる。平面形状は円形～楕円形基調が多い。一部、明確な楕円形ないし方形が存在し、長軸方向を手掛かりに時期推定可能な例も存在する(後述)。断面形状は、皿状で浅いもの、鍋状で深みのあるものが一般的である。底面を埋め戻し平坦化している例も見受けられる(SK25・28・45・49)。堆積土は、人為堆積と推定される割合が高く、黄褐色土以下の土や灰白色土の充填(SK52)のはか、各種遺物・焼土・炭化物等を含む傾向にある。特徴的な遺物出土例として、SK19の土師器坏一括廃棄?、SK28の遺物一括廃棄と土器供獻の状況(特に非クロロ坏とその細片・剥片、土師器生産・廃棄に関わる施設か)、SK31(楕円形)の鉄製刀子(墓か)を挙げておく。

f. 井戸

2基確認。いずれも底部未確認。B-Tm降下以後の構築・廃絶と推定される。ともに上部壁面の構造は白色系粘土が充填。自然堆積により埋没する。SE02より、木箸等の製品や加工木が出土。

g. 集落構造の変遷（図3）

①遺構の重複および新旧、②軸方向、③B-Tmの堆積、以上に着目し、考察する。先ず①は、重複関係が明らかな全ての事例において、新しい遺構の軸が古い遺構よりも東を示す特徴があり、遺構主軸が南から東へと変化していった可能性を暗示する。次に②は、軸方向が明確な遺構は、ほぼ南東～北東を示す。その具体的範囲は、北から東へ120～160°程度であり、更に細かくみると、130°・140°・150°という10°の差を持った3つのまとまりにわかる。そして、これら①と②の関係は、下記のとおり整理される。

古：N-150°～E < 中：N-140°～E < 新：N-130°～E 種度数は下表による大凡のまとまりを示す。

これに基づき、一つの試みとして、重複の無い遺構の軸を上記に当て嵌めると、下表のとおり区分される。なお、土坑は重複・主軸が比較的明確な事例を抽出、溝・井戸のうちで自然堆積を示す遺構は最終的廃絶を示すものとして重視し、新段階へ含めた。

段階	SI	SA	SB	SD(大)	SD(中・小)	SK	SE	備考
古 (N-150°～E)	1・6・(15)・20・21 23・25	4	4	29	4・14・19・20 21・26・27・28	5・7・21・22・30	1	SI15：堅穴部が中段階。外周溝が古段階の傾向を示す。 SK39：重複より古段階以降。 SE03：自然堆積につき。新段階まで機能・継続していた可能性あり。
中 (N-140°～E)	2・4・5・7・8 10・11・13・14・15 17・18・22・24・26	1	1・3	10a-b/c 16・30	1(古)・7(III)・9・ 17・31	24・29・30・46	(1)	SK48・56：重複より中段階以前。
新 (N-130°～E)	3・12・19	-	-		1(新)・2・3・7(新) 24・25	28	(1)・2	SD13が作る可能性あり。

古段階（N-150°～E）。

時期：一部B-Tm降下以前に遡るが、主体はB-Tm降下直後。厳密には両者は区分される。構成：建物跡（堅穴・掘立柱）・区画施設（中溝・小溝・塙）・土坑・井戸。調査区中央から北東にかけて遺構が多い。堅穴建物跡に掘立柱建物跡と外周溝が付随する割合が高い。集落の区画は、内部を堀（SA04）・中溝（SD16）・小溝で行う。外縁大溝は、少なくとも調査区内には存在しない。

中段階（N-140°～E）。

時期：B-Tm降下以後。構成：建物跡（堅穴・掘立柱）・区画施設（大溝・中溝・小溝・塙）・土坑・井戸？。調査区中央から北西にかけて遺構が多く、北東の大溝付近に少ない。堅穴建物跡に掘立柱建物跡と外周溝が付随するものの、外周溝が伴う割合は低い上、浅く部分的に途切れる家屋もある（SI05・08）。掘立柱建物には、平面・柱穴規模が大きく、他よりも特殊な感のある施設が存在する（SB01）。集落の区画は、外縁を大溝（SD10）、内部の大区画を堀ないし柵列（SA01）で行う。

新段階（N-130°～E）。

時期：B-Tm降下以後。構成：建物跡（堅穴）・区画施設（溝・塙）・土坑・井戸跡。中段階同様、調査区中央から北西にかけて遺構が多く、北東の大溝付近に少ない。堅穴建物跡には、掘立柱建物跡のみが付随。区画施設は、中段階同様、外縁を大溝、内部を中溝（SD07・25）で行う。大溝・中溝（SD25）・井戸は、自然堆積によりその役割を終える。

このように、各段階とも一定の基軸に合わせ、かなり整然と施設（遺構）が配されており、集落構造および景観が相当規格的である。さらには集落形成や変遷が計画的かつ高度に行われた可能性までもが指摘される。ともかく、いずれの各段階においても調査区中央付近における遺構密度が高く、土地や空間に何らかの制約があったことをうかがわせる一方、北東と南西ほど遺構密度が希薄となる点

が、集落の継続性や伝統性、ひいては居住者の同族性を表していると思われる。なお、各段階の歴史的復元をより具体化すると、下記のとおりとなる。要点として、中段階における大溝の出現、中段階以降における外周溝の衰退が挙げられる。

古段階：集落の初現期を示している可能性が高い。集落内部は中・小溝等による部分的区画、各家屋は深さのある外周溝による区画が発達。集落外縁の大溝は不明瞭だが、最も幅広の中溝（SD29）が次段階にSD10（大溝）と関連してSD16に改築される動きを重視すれば、既に外縁を比較的大規模な溝で区画する意識が働いていたか、あるいは動き始めていたとも理解される。

中段階：遺構数・密度が高く、集落の発展・充実期を示している可能性がある。集落外縁は大溝による区画、集落内部は中溝等による大区画、各家屋は外周溝による区画が弱まる。大溝による集落内外の区画と中溝による集落内部の区画が発達に対し、各家屋の区画意識が低下した感がある。

新段階：遺構数・密度が低く、集落の衰退期を示している可能性がある。中段階に類似した様相を示すが、各家屋に外周溝は認め難い。

以上で問題となるのは、複数段階に亘ると予測される継続性・漸移性の高い遺構の存在である。その中には初期段階の特徴を強く示す遺構もあれば、逆に最新段階の特徴を強く示す遺構もあるだろう。幾度か改築されている大溝や、堅穴建物跡と外周溝の軸が合わないSI15が好例であり、厳密には上述のような単純な区分は成立しない。その意味において、上記の3区分は、各遺構が機能した中心時期を示していることとなる。とはいっても、重複傾向に明らかなとおり、提示した変遷・傾向の大きな流れに大過はないと判断され、後述する土器変遷の整合性にもその一端が表れていると思われる。

(佐藤)

2) 遺物

a. 土師器・須恵器

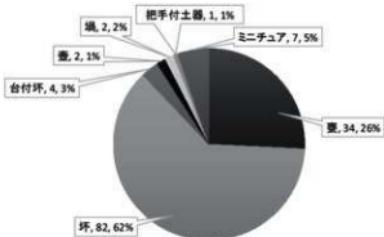
(1) 器種組成

遺構内・遺構外から出土した土師器には壺・台付壺・壇・甕・壺・小型土器が見られる。壺・甕は口縁部が1/4以上残存する口径復元が可能なものを1個体とし、それ以外の器種については、器種分類が可能なものを1個体とカウントした。

カウントした132個体についての器種組成は上図の通りである。壺が62%、甕が26%、小型土器が5%、台付壺が3%、壇が2%、壺・把手付土器が各1%である。壺の割合が多いのが特徴的である。また、壺82点のうち、黒色処理が施されたものが41点と50%を占めている。この壺の割合と黒色処理の多さは、(2)で詳述するSK28からの出土が多いことが影響していると推察される。

(2) SK28出土土器について

SK28からは、土師器の壺・甕・須恵器の壺・甕・壺・製塩土器・被熱した砾石・土鉢・焼成粘土が出土した（第3章第5節参照）。なかでも、黒色処理された壺が多く出土している。壺の外面は、口縁部がナデ調整あるいはミガキ調整され、体部下半にケズリ調整が施されている。内面はミガキ調整後黒色処理されている。外面口縁部のミガキ部分にも黒色処理されているものも見られる（図60-1～

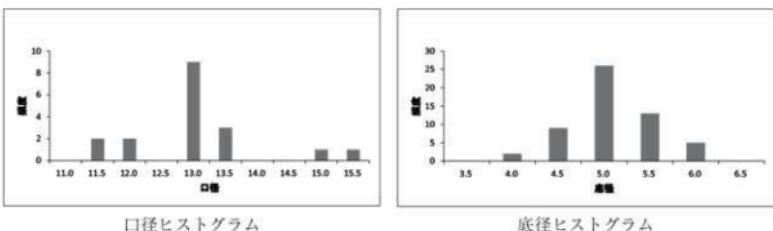


7、巻頭図版)。

SK28から出土した土器部壊破片の口縁部及び底部について黒色処理の有無、破損状況の観察をおこなった。口縁部破片は122点、底部破片は115点である。

口縁部破片122点中、黒色処理のものが106点であり、87%を占める。底部破片115点では、内面が残存しているもの25点中、黒色処理のものが22点と88%を占めている。

口縁部、底部で径の復元が可能な1/4以上残存する資料（口縁部18点、底部60点）について、径の分布を下図に示す。口径は11~15.1cm、底径は3.8~6.0cmに分散するが、口径は13.0cm前後、底径は5.0cm前後に集中する。



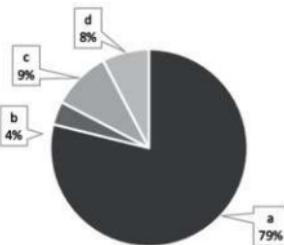
破損状態を観察すると、口縁から体部下半あるいは底部まで残存しているものでも、口縁はほぼ完形で、体部から底部にかけての片面のみが欠損しているものが多い。体部の割れ面は、内面を残し、外表面が薄く剥落したものが見られる（写真図版8、図60-3・4）。底部の破片は、115点中、剥離が見られるものが104点と90%を占めており、残存状況から以下の3類に分類できた。

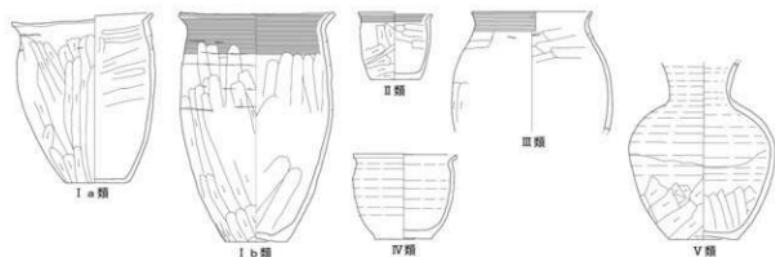
- a. 底面は残存し、内面が剥落しているもの（図60-9・10）。
- b. 底面は残存し、内面が一部あるいは全面残存するもの（図60-11・12）。
- c. 底面が剥落し、内面が一部あるいは全面残存するもの。
- d. 内外面とも剥落するもの。

これらの割合を右図に示す。aが82点、bが4点、cが10点、dが8点で、aが79%を占める。dについては、小破片のためbあるいはcの一部である可能性がある。aは、成形時の粘土の積み上げ部分で内面の表面が剥落しているものがあり、図60-10では、底部成形時の指による圧痕が横方向に連続して見られる。口縁から体部の破損状況とあわせると、体部下半あるいは底部に一定の力が加わって破損したものと推定される。

(3) 時期的変遷について

土器・須恵器の時期的変遷を検討するため、壊・壊の分類を行った。壊は器高/口径の値（以下口径指数と記載）が0.3以下のものをⅢとした。壊は器形からⅠからⅤ類に分類した（次ページ参照）。Ⅰ類はいわゆる長胴壊で、a類とb類に細分した。a類は非ロクロ成形で、口縁が短く外傾し、端部が丸みを帯び、体部最大径が体部上半にくるもの、b類はロクロ成形で口縁が“く”の字状に大きく広





がり、端部が平坦で、体部最大径が体部中央付近にくるものである。II類は口径が15cm以下の小型のもの、III類はいわゆる球胴甕、IV類は鉢形のもの、V類は須恵器を模倣したものとした。

壺は口径10.8~15.1cm、底径4.2~6.8cmに分散するが、口径は13cm前後、底径は5~5.5cmに集中する。口径指数は0.4~0.5に集中し、いわゆる塊形のものが多い。

甕は、類型の分類が可能なものの50点について見ると、I a類24点(48%)、I b類9点(18%)、II類7点(14%)、III類1点(2%)、IV類7点(14%)、V類2点(4%)であり、I a類が約半数を占める。III類はSI15SD01から1点出土した(図51-1)。口縁に外側からの末貫通孔が1つ見られる。V類は2点出土した。いずれも須恵器長頸壺を模したものである。SI03SK01から出土した図46-8は、体部中央付近で上下に割れており、下半のみに炭化物が付着する。

これらの資料について、出土状況・残存度を検討し、一括性の高いものを抽出し、竪穴建物跡の主軸変遷に合わせてまとめたものが図8である。

壺の口径指数を各段階で見ると、古段階が0.37~0.47、中段階が0.40~0.60、新段階が0.38~0.51と幅がある。平均値は古段階、新段階が0.42、中段階が0.48と中段階がやや高い。中段階のSI10からは0.51以上の壺がまとまって出土しており、他のSIと異なる様相を示していることが影響していると考えられる。このSI10を除いた中段階の平均値は0.44であり、全時期を通して口径指数に大きな違いは見られない。IIIは中段階から散見される。黒色処理された壺の口径指数は古段階0.41、中段階0.44、新段階0.43と、全段階を通して大きな変化は見られない。台付壺は古段階に見られ、内面はミガキ調整され、黒色処理が施されるものがある。

甕のI類については、I a類を伴うSIは古段階から中段階に、I b類を伴うSIは中段階から新段階に見られる。I b類が出土するSIは遺跡内で新しい時期に構築された可能性があるが、SI21のように古段階においてI a類とI b類が共存するものもあり、更なる検討をする。II類はI a類が出土するSIから多く出土しており、調整や器形からI a類を小型化したものと考えられる。IV類は全段階に見られ、器形・調整とともに変化は見られない。ただし、帰属段階は不明であるが、SD03から出土したIV類のロクロ成形の鉢は内面にミガキ調整後黒色処理が施されており、特徴的である。

b. 木製品

木製品は、SE01・02から出土した。器種の分類が可能なものは、SE01が12点、SE02が41点である。図示したものは17点である（図63）。器種は、雑具（燃えさし）、加工木、不明木製品、割材、丸木がある。ここでは、多く出土したSE02について詳述する。

（1）器種

雑具（燃えさし）（図63-1～5）は細い割材や丸木を利用し、先端が炭化したものも含めた。10点出土した。マツ属複維管束亜属が4点、アスナロが3点、サクラ属が2点、クリが1点である。

加工木（図63-6～14）は20点出土した。アスナロが17点、アサダ・スギ・ハンノキ属ハンノキ亜種が各1点である。形態からくさび状のもの（6～8）、方形のもの（9～11）、板状のもの（12-13）、角材（14）に分けられる。くさび状のものは、丸木や割材を利用し、先端が両面からあるいは片面からのみ斜めに削り出されているものを一括した。3点出土している。丸木を利用したものはハンノキ属ハンノキ亜属で（7）、割材はアスナロを使用している（6）。方形のものは、両端が斜めあるいは垂直に切り落とされているものを一括した。5点出土し、すべてアスナロを利用している。形態から、くさびとしての利用も考えられる。板状のものは、9点出土した。12は先端に向かって細く削り出されている。角材は1点の出土で、アサダを利用している。

不明製品（図63-15～17）は10点出土した。芯去削出で、細棒状に加工されている。すべてアスナロを使用し、厚さは0.4～0.6cmとまとまりがある。

（2）樹種

すべての器種をまとめてみると、アスナロ31点、サクラ属2点、クリ・アサダ・スギ・ハンノキ属ハンノキ亜種各1点とアスナロが全体の75.6%を占める。加工木・割材でもアスナロが優位を占め、不明製品はすべてアスナロである。それに対し、雑具（燃えさし）はマツ属複維管束亜属が最も多く40%を占め、アスナロが30%、サクラ属20%、クリ10%と利用している樹種が多様である。

c. 鉄製品

遺構内・遺構外から出土している。器種の分類が可能なものは、29点出土し、図示したものは18点である。図10に出土した鉄製品をまとめた。

苧引金（1～4）は4点出土した。1・2は同一個体と考えられる。端部よりに把握部装着用と考えられる径2～5mmの孔が見られる。幅は1.1～1.6cm、厚さは0.2～0.3mmである。

刀子（5～8）は5点出土した。5は全体が鏽で覆われ、X線で形態を確認した。ほぼ完形と見られる。長さは13.4cm、幅は刃部で1.4cm、柄部で0.5cmである。断面形は確認できなかった。6は両端が欠損する。刃部の幅は1.1cm、柄部は0.8cmで、刃部の断面は三角形を呈する。刃部背側の厚さは0.5cmとやや厚い。7・8は刃部のみの出土である。幅は1.3～1.4cmで、断面は三角形を呈し、刃部背側の厚さは0.2～0.3cmである。

釘状鉄製品（9～11）は、棒状で先端が細く尖るものを一括した。11は棒状の片端が板状に広がり、屈曲している。先端に向かってやや細くなる。

環状鉄製品（17・18）は2点出土した。17は板状のものに環状の一部が付着した状態で出土した。高屋敷館跡から出土した錫杖鉄製品に類する可能性があるが、環状の部分と板状の部分とは連結していない。18は2個の環が連なっている。17と18はまとめて出土しており、同一個体であった可能

性がある。

棒状鉄製品(12~14)・板状鉄製品(15・16)は器種を特定できないものを形状で一括した。15はやや厚手で、台形を呈する。

d. 炉壁・焼成粘土

SI10・22、SK28、SD31、遺構外から炉壁・焼成粘土が出土した(図65~68)。

(1) 炉壁

SD31から炉壁の一部が出土した(図66)。羽口の装着部分も見られる。幅3~5cm程の輪積痕があり、表面はナデ調整、裏面の羽口の装着部分周辺にはガラス質津が付着する。羽口装着部分は推定長軸7.8cm、短軸6.2cmである。本遺跡から出土した羽口の復元外径は6.0~9.0cmであり、炉壁の装着部分と同規模である。図67-1・2も炉壁の一部で、内面にガラス質津が付着する。

炉壁と羽口については、自然科学分析から、海成粘土を使用し、テフラと凝灰岩類を含み、また、炉内には1150°C以上に達していた部分もあると考察している(第6章第2節参照)。

(2) 焼成粘土

図65-3・4は、表裏面と側面が残存し、胎土にスサを含む。3は表面が赤褐色、裏面が黒褐色を呈する。表面は平坦なナデ調整で、裏面はほぼ直角に屈曲する。表面と平行する平坦面には、長軸方向に平行する幅3~4mmの直線的な痕跡が見られる。側面の表側約8mmは欠損し、裏側が残存する。残存状況から、全体は凸字形を呈していたと推定される。直線的な痕跡は、4にも見られる。幅4.5mm、深さ5mmの段があり、内部に長軸方向に平行する筋状の痕跡が見られる。3・4とも、当該部分に板状のものを押しつけた可能性がある。図65-1・2、図68-3・4は胎土にスサを含む。

図68-2は、表面と側面3面が残存し、表面が平坦になるよう成形されている。胎土にスサは含まれず、表面に炭化物が付着する。青森市山元(2)遺跡、上野Ⅱ遺跡、旧蓬田村蓬田大館遺跡で埠状土製品あるいは焼成粘土板として類例が見られる。蓬田大館遺跡では、「カマドや炉の袖部あるいは天井部の構築材として用いられたものであろう」と推定している。

(藤原)

e. 炭化穀物塊

熊沢溜池遺跡、郷山前村元遺跡から出土した。ここにまとめて記載する。

[出土位置・状況]熊沢溜池遺跡: SI15SD01-覆土(C1~C9)・SK45-1層(C1~C22)、郷山前村元遺跡: SK01-1層(C1)。前者は元来SK45内の人が堆積層に存在していたものが、後に構築されたSD15SD01に流入・混入したとみられる。後者も人が堆積土中から土器片・炭化物・焼土粒等とともに出土。[点数]出土地点を記録したものは各々9点・22点・1点であり、他にも覆土中から適宜取り上げている。[分析等]前者は表面のみの観察では内部構造の把握が困難なため、X線CTによる分析・図化を行い、後者も専門的見地からの観察・検討を委託した。あわせて、遺構内採取土壤から採取した炭化種実や土器表面の種実圧痕分析も行い、複合的検討を行うための基礎データ作製に努めた。

(佐藤)

3. 江戸時代以降

陶磁器・寛永通宝(古寛永)等の遺物がわずかに出土しており、何らかの人的活動があったといえる。特に陶磁器は、平安時代の大溝(SD10)の最上層から数片出土しており、本段階においても同遺

構が凹地として残っていた可能性を暗示する。更に同層からは、ソバ栽培の可能性を示す花粉分析結果も得られており（6章2節）、本時代には耕作地と化していた可能性も指摘し得る。先に触れた掘立柱建物跡1棟（SB02）は、本段階に属する可能性もある。

第2節 上野遺跡

3次調査では、縄文および平安時代の遺構・遺物が発見された。適宜、過去の報告も交えて要約し、熊沢溜池遺跡と同様に検討する。

1. 縄文時代

早期中葉から晩期にわたる人的活動が断続的に認められる。特筆すべきは、中期中葉の円筒上層e式段階における小規模な集落形成である。他は、各時期の遺物がわずかに散布する程度である。

1) 遺構（図4）

堅穴建物跡3棟（SI25・26・27）、掘立柱建物跡2棟（SB04・05）が該当。2次調査で縄文時代中期以降と推定された掘立柱建物跡2棟（SB02・03）が報告されており、本段階に属する可能性が高まつたといえる。ここでは上記遺構を同時期と仮定し、現時点で判明した事項を要約する。

集落立地：緩斜面上。丘陵頂部（現在：県道34号）から、本来は深い沢だったと考えられる宝溜池へと下る地形。東側にも同溜池につながる谷ないし沢（現在：熊沢溜池遺跡へと続く道路）が存在したとみられる。

集落構成：堅穴住居跡3棟、掘立柱建物跡4棟。現状、外側に掘立柱建物跡、やや内側に堅穴建物跡が位置するようにみえる。以上は外縁部と目され、中心部は3次調査区の北側一帯と推定する。

堅穴建物跡：平面形状は、円形（SI25・26）ないし梢円形（SI27）を基調とする。直径は約1.8m（SI26）、約2.1~2.4m（SI27）、約3.5m（SI25）、深さ25cm程度。黒色土付近で確認した遺構は、当時の規模・深さに比較的近いと推定。炉の位置は全て中央付近。炉の形態は、（推）地床炉（SI26）、（推）土器埋設炉（SI25）、土器埋設炉（SI27）。主柱穴は、壁際（SI25）、中央に3基（SI27）、不明瞭（SI26）。3基の例は炉を開む位置に深く明瞭に設けられる。建物内部には、特殊施設（SI25）を備えた例がある。中央の大きな凹みの縁辺には、小Pitと周堤状の高まりを伴い、建物本体から張り出す特徴がある。

掘立柱建物跡：平面形状は、a. 長方形（SB03）、b. 五角形（SB04）、c. 不明（SB02・05）に区分される。aは1×2間であり、cのうちSB05は1×1間の長方形あるいは1×2間以上になる可能性もある。いずれも長軸は北東-南西と推定され、N-30°-E（SB03・04）、N-45°-E（SB05）を示す。同じく短軸は北西-南北軸と推定され、N-120°-E付近（SB02-03-04）、N-135°-E付近（SB05）を示す。SB05以外のまとまりは、わずか3°の範囲に収まり、軸方向が著しく統一されている。つまり、これらの建物が規則的に並んでいたことになる。平面規模は、長・短軸を上記のとおり仮定した場合、SB02が不明×280cm程度、SB03が560（280+280）×280cm程度、SB04が240ないし350×290cm程度、SB05が390×280ないし320cm程度である。北西-南北軸（梁行か）は4棟全てが280~290cm前後にまとまる一方、北東-南西軸（桁行か）は240（SB03北西側・04）・260（SB03北西側）・280（SB03南東側）・350（SB04）・390cm（SB05）となる。SB03は不整形ながら、梁行：桁行比が1:1ないし1:1未満（0.85か0.92）である。柱穴は円形基調、径40~60cm程度（50cm前後に集中）、深

さ35~70cm程度（60~70cmに集中）。柱痕は、径20~40cm程度（30cm前後に集中）、覆土や底面に痕跡が残る傾向にある。なお、建物間の距離は、9m前後（SI25-SI26、SI25-SB04、SI27-SB05）、18m前後（SI27-SB03）、32m前後（SB03-SB02）、掘立柱建物間の距離は25・28・32m前後となっている。

（佐藤）

* 南東側で計測した場合。北西側は500cm（260+240cm）程度となる。

2) 遺物

上野遺跡では平成18・20・28年の3回にわたる調査で、縄文時代早期、前期、中期、後期の土器が出土した。各時期の土器について概観する。

早期：平成28年に遺構外から出土した。図90-11は深鉢の体部下半で、底部付近の資料である。底部に向かって細く窄まり、尖底となる可能性がある。表面には貝殻腹縁押し引き文が施され、胎土に纖維を含む。早期中葉の吹切沢式に属すると考えられる。図90-12・13は微隆帯による文様が見られる。13の内面には、口縁下に横方向の沈線が施される。早期中葉のムシリI式に属すると考えられる。

前期：平成28年に遺構外から出土した図90-14は、口唇部に竹管による刺突、口縁から体部に連続刺突文とコンバス文が施され、胎土には纖維が含まれる。前期前葉の表盤式に属すると考えられる。また、円筒下層d1式・d2式土器も出土している。平成20年にはSB02の柱穴から下層d1式の土器片が出土した。

中期：円筒上層a式及び上層a・b式土器、円筒上層d式・e式土器が出土した。平成20年には、SB03の柱穴から上層d・e式の土器片が出土した。また、円筒上層e式土器は、平成29年の遺構外と平成28年のSI27から出土し、垂下する沈線文と横位の沈線文が施文される。SI27の炉体土器である図88-9は、体部中央付近にふくらみを持ち、口縁下と体部中央に文様帶を区画する横位沈線文が施される。区画された体部上半には連続弧線文が展開し、円筒上層e式から櫻林式に相当するものと考えられる。SI25・26・27から出土している土器は、この時期に属するものが多い。

後期：平成18・20年に遺構外から十腰内I式土器が出土した。横位沈線や円文、波状入組文が施される。これらの資料から、上野遺跡では縄文時代早期中葉から後期前葉にかけて、部分的な断絶はあるものの、人との関わりがあったと推察される。

（藤原）

2. 平安時代

降下火山灰や五所川原産須恵器の在り方からすると、集落の中心時期はB-Tm降下以後とみられ、熊沢溜池遺跡同様、幾度かの変遷がある。集落形態は、外縁を大溝、内部を中小の溝で区画し、その中を建物跡が整然と並ぶ様子を示す。集落変遷は、各遺構の重複・主軸・長軸方向の相違などから3段階程度と想定され、土器も緩やかに変化したとみられる。生業として、イネ・雜穀の生産・保存、鉄生産・鍛冶が行われた可能性がある。集落外よりもたらされた製品として、須恵器・製塙土器（塙）のほか、鉄素材・製品の流通・加工・利用もあったと考えられる。2次調査における東濃産綠釉陶器深碗片（製作年代：10世紀中葉）が注目される。

1) 遺構

a. 穴窓建物跡（図1・2）

23棟確認 (SI23・24が今回報告分)。建物構成は、堅穴建物跡を核に、掘立柱建物付随の有無がある。

堅穴部規模：熊沢溜池遺跡同様に計測すると、縦は小2.4~3.0m (7棟)、中4.2~5.1m (6棟)、大6.3~6.6m (4棟)。同じく横は、小3.0~3.3m (4棟)、中4.8~5.4m (4棟)、大6.3~6.9m (3棟) に区分され、分化は縦・横とも比較的明確である。床面積は、小9m²、中26m²、大：42m²前後であり、小-中で約3倍、中-大で約1.6倍の差となっている。なお、上記でみると各規模の割合は同等だが、後述する段階別では古段階に大は無く、新段階に中が無い。規模の拡張は、SI13~SI22にその可能性がある。遺構密度の割には同一地点における重複が多く、各戸の土地利用に一定の制約があったように見受けられる。

堅穴部柱穴配置：主柱は1辺約4m前後を境に増加、5m以上は高確率で備わる。

堅穴部の主軸：①N-130°-E、②N-140°-E、③N-150°-Eの3種を示す傾向にある。重複数が少ないのが難点だが、新旧は全て③→②→①の順となっており、熊沢溜池遺跡とは逆の特徴がある。

カマド：15棟で確認。1棟につき1基設置。基本、南東壁際の右側に位置し、例外的に南東左側(SI20)や南北中央(SI12)が認められる。地下式(SI12)の一例を除き、全て半地下式。本体は白色系粘土を主体的に用いて造られたと推定されるが、袖部や火床面のみが残存する傾向にある。煙道部は、長(SI12・13・16・18・21・22)、短(SI08・20・23・24)、不明(SI06・10・11・15・17)に区分される。支脚数は、1基(SI10・18・20・23・24)と2基(SI21)であり、中には5個体もの土器を入れ子状に伏せ置かれた例(SI18)もある。また、袖部の焚口付近に土師器壺の設置例(SI08・11・18・21)がある。カマドの多くは、最終的に人為的破壊を受けたとみられる。

壁溝：1辺約3m以下は、高確率で不明瞭もしくは存在しない。

内部施設：張出部・内土坑・出入口・埋設土器が認められる。張出部は1例(SI24)あり、その規模は縦180cm、横180cm程度である。一辺5.4m(横)の建物であり、建物規模に対する張出部長の割合は、縦・横とも3分の1前後と想定される。大型の内土坑は9例(SI06・08・11・12・15・18・19・20・24)あり、カマド脇中央付近(SI06・18・20)や隅角(SI06・08・12)に設けられる。出入口が明確なのは1例(SI24)あり、カマドと同じ南東壁際にスロープ状に備わる。

掘立部：明確な例は少ないが、平面形状は、方形ないし長方形、1×2間ないし2×1間が主とみられる。平面規模は、縦2.7・4.2・4.5m (4.2mに若干集中)、横3.6・4.8m (3.6mに若干集中)。床面積は15m²程度。柱穴は円形基調が主、一部方形基調、径20~50cm程度(30~40cm前後に集中)。柱痕は径20~30cm程度、覆土中や底面に痕跡を残す。掘立部の付随は、堅穴部の規模が1辺約4mを境に増加し、5m以上は高確率で伴う。

建物の廃絶：焼失は4棟(SI08・10・11・12)、人為堆積による埋め戻しが多い。不明とされたうち、重複関係より人為堆積の蓋然性が高いと推測される家屋もある(SI10・11・20)。

b. 溝跡

11条確認 (SI17・18・19が今回報告分)。須恵器・降下火山灰の在り方および堅穴建物跡と調和性より、B-Tm降下以後の構築・廃絶と推定。以下、想定される機能・性格ごとにまとめる。

a類、集落外縁を区画する大溝および付帯施設 3条 (SD07-09-19)

b類、集落外縁あるいは内部等の区画施設 6条 (SD10-11-13-14-15-18)

c 類、堅穴建物内部から外部へ延びる施設 2条 (SD16-17)

a 類は集落内外の境に築かれた大溝と目される。SD07・09・19は、規模・形状・位置関係から同一と推定。これにb 類のSD11が直交・分岐し、宝溜池への延びる北東の谷へと続く可能性が高い。b 類は、SD10・13が同一、これにSD15が直交・分岐すると推定。SD14もSD15に直交するようにみえるが、やや規模が大きく深いため、一連化するかは不明。先のSD11には、SD13が直交・分岐する可能性があり、a 類と同等の規模・役割があったとみなされる。SD18は北東の谷へと下る施設で、集落とは逆の外側に掘土上土が認められた。c 類は、SD16がSI22に付随。SD17はSI14に付隨すると仮定。特徴的な遺物の出土例として、SD18底面上に正立する土師器坏、SD19底面～底面直上（底面上約2cm）における土器片の散布が挙げられる。なお、滯水・流水を示す溝は、特に認められていない。

c . 円形周溝（図7）

2基確認。ともに内径7～8m、溝幅40～60cm・深さ20～70cm程度。楕円形か。2号円周は、黒色土で調査・計測した値であり、比較的当時の規模に近いと推定。出土遺物は無きに等しい。重複する全ての遺構よりも新しく、B-Tm降下以後の構築・廃絶である。ともに黒色土の自然堆積であるため、最終段階に構築・廃絶した遺構の一つと推定する。

d. 土坑

25基確認※。平面形状は円形～楕円形基調。主軸が比較的明確なのは、SK05（N-135°-E）、SK08（N-145°-E）、SK11（N-155°-E）、SK25（N-115°-E）。断面形状は、皿状で浅いもの、鍋状で深みのあるものなどがあり、底面を埋め戻して平坦化した例も見受けられる（SK23・25・29）。堆積土は、人為堆積と推定される状況の割合が高く、黄褐色土以下の土・各種遺物・焼土・炭化物等を含む傾向にある。降下火山灰との関係が比較的明確な遺構は、SK05がTo-a自然堆積（10世紀初頭か）、SK03・15がTo-a二次堆積（10世紀前半か）、SK08・11・17・21・23がB-Tm二次堆積（10世紀中葉か）とされる。時期比定が明確な遺物として、SK11に五所川原産前田野目系長頸壺の破片が1点伴う。他は土器破片が主体である。

※ SK10-13-14は、規模・形状・位置関係・他遺構との重複関係からすると規模の大きな柱穴ないし掘立柱建物の一部のようにもみえ、中でもSK10-13-14 SI10に付隨する可能性も想定される。また、SK25は、堅穴建物跡の可能性もある。

e. 集落構造の変遷（図5・6）

熊沢浴池遺跡同様、遺構の重複・新旧と主軸・長軸方向の関係を整理すると、以下のとおりとなる。
古：N-130°-E < 中：N-140°-E < 新：N-150°-E ※度数は下表による大凡のまとまりを示す。

段階	SI	SB	SD (大)	SD (中・小)	SK	円形周溝	備考
古 (N-130°-E)	7・9・18・20・23 24	6・7・8	-	-	25	-	SK25・SD06：特に古廟寄り。
中 (N-140°-E)	1・4・10・11・12 13・14・15・16・17 21・22	-			4・8	-	SD06：中央階主軸と推定。 SD17：古段階のSD02以降の構築・廃絶。中段階SI22に付隨。
新 (N-150°-E)	2・3・6・8・19	-	7・9・19	10・11・13・14・15 16・17	11	1・2	SD07・09・19・19：円形周溝：最終段階まで機能していた可能性が高い。 SD10・13・15：新段階SD06以降の構築・廃絶。

古段階（N-130°-E）。

時期：B-Tm降下以後。構成：建物跡（堅穴・掘立柱）・土坑（堅穴建物か）。建物跡は調査区中央から北東にかけて多い。集落の区画状況は不明。

中段階（N-140°-E）。

時期：B-Tm降下以後。構成：建物跡（堅穴）・土坑。建物は調査区中央に集中し、一部、北東や南西にも存在。集落の区画状況は厳密には不明だが、建物跡との調和性を考えると、大溝・中溝は本段階には成立していた可能性もある。遺構の多さ、建物間の重複状況からすると、更に細分される可能性もある。

新段階（N-150° - E）。

時期：B-Tm降下以後。構成：建物跡（堅穴）・区画施設（大溝・中溝）・円形周溝・土坑。建物跡は調査区中央のやや西寄りに展開。北東の大溝付近に少ない。SI06<SD10の重複にみるとおり、幾つかの変遷も考えられる。本段階終末に円形周溝2基が存在していたと推定。

上記は、あくまで数少ない重複数の中に、熊沢溜池遺跡同様の軸変化を認めたことに基づく解釈である。先のSK05や郷山前村元遺跡における円形周溝の在り方からすると、将来的には更に古い段階の設定も見込まれるなど、幾つかの課題を含んでいる。しかしながら、本遺跡でも集落構造・景観の規格性・計画性、遺構重複にみる土地空間の制約性および所有、集落の継続性・伝統性・同族性が表れていると考える。

（佐藤）

2) 遺物

a. 土師器・須恵器

平成18・20・28年の調査で、壺、甕、羽釜、塙が遺構内・遺構外から出土した。ここでは、報告書掲載資料について概観する。壺、甕の分類については、熊沢溜池遺跡出土遺物に準拠する。

壺は口径11.6~16.4cm、底径4.4~8.0cmに分散するが、口径は13cm前後、底径は5~6cmに集中する。口径指数は0.35~0.5に集中し、いわゆる塊形に近いものが多い。甕は、類型の分類が可能なものの107点について見ると、I a類48点(45%)、I b類23点(22%)、II類26点(24%)、III類1点(1%)、IV類9点(8%)とI a類が半数近くを占める。

これらの資料について、出土状況・残存度を検討し、一括性の高いものを抽出し、堅穴建物跡の主軸変遷に合わせてまとめたものが図9である。SK08・11は重複がある遺構の段階（中段階）に入れてあるが、中段階を下限とするものである。

壺の口径指数を各段階で見ると、1段階が0.38~0.47、2段階が0.34~0.48とほぼ同じ分布を示す。平均値では、1段階が0.44、2段階が0.40と、2段階になるとやや低くなる傾向が見られる。皿と黒色処理された壺は1段階、2段階に見られる。

甕のI類については、I a類・I b類とともに1段階にも2段階にも見られる。重複により新旧の分かるSI13・18・21・22を見ると、SI18が1段階、他が2段階に属する。1段階のSI18と2段階のSI21はI a類が、2段階のSI22・13はI b類が主体となる。1段階のSI18から2段階のSI22・13への変化と、2段階のSI21からSI13への変化から、甕I b類からI a類への変遷が窺え、これまで指摘されてきたロクロ成形から非ロクロ成形への変化と合致する。しかし、大きく概観すると、I a類、I b類ともほぼ同じ軒数のSIが存在し、3段階においてもI b類が主体となるSIが見られることから、I a類からI b類への変遷は緩やかで、それぞれの土器を使用する人々が連続して集落内に居住していたと考えられる。II類はI a類が出土するSIから多く出土している。

また、甕と壺との共伴関係を見てみると、2段階においてI a類に共伴する壺の口径指数の平均は

0.45 (SI22)、I b 類に共伴するものは0.39 (SI10・11・12・21) と、I a 類に共伴する坏のほうが塊形を呈し、I b 類に共伴するものがより浅い傾向が窺える。但し、I b 類に共伴する坏でも、1段階では0.43と塊形に近い値が得られており (SI18)、時期による変化と合わせて考える必要がある。

b. 鉄製品

平成18・20・28年の調査で出土した鉄製品を図11にまとめた。鎌、刀子、筒状鉄製品、棒状鉄製品、板状鉄製品が出土している。

鎌 (1) はほぼ完形で、着柄部寄りはL字形に折り曲げられている。高屋敷館遺跡第48号住居跡から類似する資料が出土している。刀子 (2~9) は幅0.8~2.4cm、厚さ0.3~0.5cmである。筒状鉄製品 (10~13)・棒状鉄製品 (14~21)・板状鉄製品 (22) は器種を特定できないものを形状で一括した。12は径2mmの孔がある。14は断面から刀子の可能性がある。15~21は断面形が方形を呈し、厚さが0.3~0.5cmである。16は先端に向かってやや細くなっている。針状鉄製品の可能性が考えられる。

(藤原)

c. ガラス玉 (図69・91)

[出土位置・状況] 上野遺跡遺構外出土 (IP-25 II~III層)。平安時代中期のSI24 (B-Tm降下以降の構築・廃絶) に付随する掘立部に近接。同遺構構築面に近い地層・標高 (32.565m) から出土 (図71)。発見の経緯は、表土掘削前に先行トレンチを設けた際にSI24の堅穴部を確認し、その規模から掘立部の存在が予測されたため、掘立部の構造把握・追究を目的とし表土から人力で慎重に掘削していたところ、黒色土上部中において作業員が発見した。掘立部確認面と同様の地層・標高である。[点数] 1点。[大きさ] 上面10mm×側面8mm程度。孔径3~4mm。[特徴] いわゆるトンボ玉。母材 (基礎ガラス) に紺色→赤褐色の順に細いガラスが巻き付けられている。母材は、やや青みがかった乳白色で気泡が入る。紺色ガラスは2周以上、赤褐色ガラスは紺色ガラスとは逆方向で2周巻き付けられた後、変形可能な温度を保っているうちに上下5ヶ所、計10ヶ所をビンセット状工具で摘み、各々時計回りに約180° 捻ることで突起と入組文風の特徴が表現されている模様である。突起1ヶ所に発見時のわずかな欠損があるが、欠損部位の発見に至らなかった。[風化] 特に目立たず脆弱化もしていない。[成分] カリ鉛ガラス (6章2節参照)。蛍光X線元素マッピング分析による。鉛含有量が低く、母材部分にアンチモン (Sb_2O_3) が多い特徴があるが、こうした類例は稀とされる。[小結] カリ鉛ガラスは、日本国内において10世紀末以降 (清涼寺初現) に現れる成分であるが、その変遷は研究途上であり、本製品の具体的年代も現段階において不明である。類例は本県では知られていないが、北海道には13世紀~14世紀頃のもの (伊達市有珠オヤツ遺跡・厚真町オニキシベ2遺跡など) がある。しかし、本遺跡出品とは材質・成分・風化具合が異なっている。今後、分析数が少ない古代以降のガラス玉の分析事例の増加、および古い分析データの再分析・再検討を通じ、本製品の位置付けも具体化していくとみられる。

(佐藤)

第3節 郷山前村元遺跡

1. 縄文時代

人の活動痕跡は非常に乏しく、遺物がわずかに発見された程度である。

1) 遺物

縄文土器は前期、中期、晩期の深鉢が出土した。図97-6は台付深鉢である。体部上半には入組帶状文が展開し、入組部を開む三叉文が施される。台部は無文である。大洞B式期に属すると考えられる。図97-7は口縁部に横位に3段の刺突が施され、下部に弧状の刺突が展開する。胎土に纖維を含む。前期前葉に属すると考えられる。

(藤原)

2. 平安時代

B-Tm降下直前から直後にかけての人的活動痕跡が認められ、円形周溝・溝・土坑が形成される。

1) 遺構

a. 円形周溝（図7）

4基以上確認。重複・拡張等の可能性を最大限考慮した場合、6基と考えられる。黒色土ないし黒色土～黄褐色土で検出・精査。平面形状は、いずれも隅丸方形～隅丸長方形とみられる。規模は、特大：11×8m（3新号）、大：8×8m（3古号）、中：4×5m（1号）、5×5m（4古号）、小：3×2.4m（4新号）、不明：4×1m以上（2号）にわかれ。不明は中規模と推定。底面は、概ね人為堆積により平坦化されており、1基のみ素掘りとなる（4古号）。埋没は、いずれも黒色土の自然堆積。主体部や供獻遺物は、未確認である。時期は、B-Tm降下以前の構築・廃絶（1・2・3古号）のほか、B-Tm降下以後の構築・廃絶（3新号）、不明もしくはB-Tm降下以後（4新号）。なお、本段階以前に該当する建物跡および集落は、今のところ近接地に見当たらない。今後の発見が期待される。

b. 溝跡

3条確認。規模・軸方向・堆積土に類似性があり、底面の高低差が明瞭である。B-Tm降下以後の構築・廃絶とみられ、円形周溝群の区画目的のほか、降雨後の湧水が著しい場所だけに排水目的で設けられた可能性も高いと考えられる。

c. 土坑

2基確認。同一地点に構築された廃棄土坑とみられる。降下火山灰は認められないが、須恵器はB-Tm降下以前の持子沢系（MZ）であり、同火山灰降下前後の構築・廃絶と推定。炭化キビ塊の大きさは、全国的に見て最大級とのことである。

(佐藤)

2) 遺物

円形周溝、溝跡、土坑から土師器・須恵器が出土した。SK01から出土した土師器は、壺、甕ともにロクロ成形で、図96-7の甕は、体部がケズリ調整され、口縁部下にヘラ記号が施される。須恵器は長頸壺が見られる。図97-1・2・3は同一個体で、体部はロクロ成形後ケズリ調整が施される。底面には棒状工具による菊花状文が見られ、五所川原須恵器窯跡MZ系と考えられる。

(藤原)

第4節 熊沢溜池遺跡・上野遺跡・郷山前村元遺跡の主な成果と課題

3 遺跡における関連性・同異・課題などを時代ごとにまとめ、結びとする。

1. 繩文時代

人的活動が認められるのは、早期が吹切沢式・ムシリ式（上野）、前期が表館式（上野）・円筒下層d式（熊沢溜池・上野）、中期が円筒上層a・b・d・e式、楓林式（上野）、後期が十腰内I式（上野）、晚期が大洞B式（熊沢溜池・郷山前村元）段階である。円筒上層e式期に小規模な集落（上野）、大洞B式期頃に土坑（熊沢溜池）が築かれた他は、土器片をわずかに残す程度の動きに留まっている。

2. 平安時代

To-a以前に土坑（上野）、B-Tm降下以前に円形周溝群（郷山前村元）・土坑（熊沢溜池）・溝（熊沢溜池）が築かれており、10世紀前葉頃には人的活動が始まっていたと思われるが、建物跡は明確ではない。

集落形成が本格化するのは、B-Tm降下以後の10世紀中葉以降である。この時期、熊沢溜池遺跡と上野遺跡では集落が発達していくのにに対し、郷山前村元遺跡は先の円形周溝を避けるように区画なしし排水溝が幾つか設けられる程度となり、集落と墓という区別・概念・土地利用が確立していたと可能性が高い。

その集落立地は、上野遺跡が標高約34~37m、熊沢溜池遺跡が標高約32~36m前後の丘陵ないし台地端部の緩斜面上に位置する。前者は津軽平野に面し、後者は梵珠山麓よりのやや奥まった場所となっている。両集落は江戸時代前期に宝溜池や熊沢溜池となる深い沢によって隔てられているが、指呼の間である。

集落の形状・外観は、ともに外縁を大溝で区画、内部を同一軸による中小の溝・堀・柵で更に区画、その中にやはり同一軸の建物が整然と並ぶ姿が復元された。特に外縁大溝の構築にあたっては、付近の沢や谷などの自然地形とも上手く結びつけられていたと考えられる。また、竪穴建物跡と溝は、同一地点に継続・集中して建て続けられる傾向が強く、各集落内や各戸における土地所有と制約、建物および住人の継続性・伝統性・同族性までも垣間見える。

集落変遷については、とともに古・中・新3段階程度と想定した。これは、各遺跡における遺構の堆積土（火山灰）と堆積状況（人為・自然）・重複および新旧・軸方向、更には土器様相（出土状況・残存率・五所川原産須恵器の在り方）から導き出している。両者の時間的関係、つまり同時性や併行関係について明言することは難しいが、降下火山灰の堆積状況と土器の類似性に着目すれば、変遷のタイミングまでもが一致していたかはさておき、存続期間はかなり一致していたと考えられる。すねわち、両集落はB-Tm降下前後に成立し、3段階程度の変遷を経て、同じような時期に廃絶したと考えられる。

核となる竪穴建物の構造は、1辺約4m以上、特に5m以上に主柱が設けられ、掘立部が付随する傾向にある。熊沢溜池遺跡のみにみられる外周溝も同様だが、時期差による有無も指摘し得る。また1辺が約3m以下の規模になると、壁溝の存在が薄くなる。

次に両集落の違いを挙げると、第一に遺構軸変化の方向性は熊沢溜池遺跡が南→東、上野遺跡が東→南へと全く逆の傾向を示す。第二に上野遺跡には堀や柵列の存在が認めにくく、第三に上野遺跡の

堅穴建物跡には外周溝が付随しない。加えて、堅穴部が6mを超えるような大型建物の割合が高いと思われる。第四に、上野遺跡では最終的に円形周溝が築かれ、やがて自然に埋没したと考えられる。

以上、両集落にみる同異は、本地域のB-Tm降下直前からそれ以後における社会変化や多様性を表す良好な一例といえる。特に熊沢溜池遺跡にみる区画概念の変化は、B-Tm降下から間もないうちに、集落内の大区画を中小の区画施設で行いつつ個々の建物までをも外周溝で区画する姿から、外縁大溝による集落全体の区画を重視する姿への変貌を示していると考える。そして、その背後に、大溝の発達と外周溝の変化・衰退・消滅（連続的かつ深く明瞭な形状→断続的かつ浅く不明瞭な形状→消失）が連動する関係にあったと捉えられる。この間、両遺跡における土師器製作の変化、ロクロ坏-器高指數の低下（楕型→皿型）、非ロクロ坏-内黒坏の定型化と非変化、甕-口縁部成型における変化（非ロクロ→ロクロ）が認められる点も興味深い。

他にも、遺構内に正立するなど人為的開拓が強く疑われる土器廃棄・祭祀的状況（熊沢溜池・上野）、東濃産縁軸土器（上野2次）・白砂式製塩土器（上野・熊沢溜池）・製鍊炉（熊沢溜池）に加え、各遺跡からイネおよび雑穀に関する資料が多数得られた事実、特にキビ塊や炭化米塊における加工・調理の一端が判明したことは、今後の資料活用や料理の歴史を考える上でも重要である。遺跡から出てきた炭化穀物塊はそのままでは単なる炭の塊であり、コメや雑穀を食べていたことが解る程度に過ぎない。しかし、専門的かつ科学的見地から分析を加えることにより、具体的な調理方法や保存方法にまで迫ることが一気に可能となり、現代人にとって非常に身近な資料と化す。反面、上野遺跡で発見されたガラス玉の年代観については、今後の課題といえる。

* 1次および2次調査報告中における本文および断面図の標高値は、ともに10mほど低く記載されているとみられる。

3. 江戸時代

当地一帯は、弘前藩田舎庄増館組に属し、遺跡所在地が示すように、熊沢溜池遺跡は吉野田村領、上野遺跡は椿沢村領、郷山前村元遺跡は郷山前村領だったとみられる。開発は寛永9年（1632）頃から始まるとされ、各村とも貞享4年（1687）検地帳にはその名を留めている。同帳には、郷山前村と吉野田村で漆本の栽培が盛んだった様子が記されており、それは嘉永5年（1852）以降成立の郷山前村漆木絵図においても知られる。なお、熊沢溜池遺跡と上野・郷山前村元遺跡を隔てる宝溜池と熊沢溜池は、天和4年（1684）絵図の写しにおいて既に認められるが、その成立は承応2年（1653）から延宝7年（1679）頃とされる。同絵図には、宝溜池が位置する塞ノ神沢の北側に郷山前村の下畠が越石として存在する。

各遺跡の発掘調査区については、丁度、3村の境に該当するとみられ、少なくとも各村の中心部からは外れている。現在の県道34号線の下に弘前藩が「小道」として整備した下之切通（小泊街道）が存在したとみて間違いなく、上野遺跡の2次調査では道路の硬化面や側溝の一部が発見されている。他方、熊沢溜池遺跡では、平安時代の大溝（SD10）が凹地として残っていた可能性を示す環境の中、陶磁器や寛永通宝（古寛永）が僅かに持ち込まれた様子が認められた。加えて、ソバが栽培されていた可能性も示されており、地理的に天和4年の絵図にみる下畠との関連性を想起させる。

* 詳細は上野道路の2次調査・報告（県486集）を参照。絵図等では不明な側溝の存在が考古学的に明らかとなった。その規模は幅50cm・深さ40cm程度。なお、道路路は幅1周半～2周（3m程度）と推定されている。

4. 課題・展望

最後に、調査方法と地質年代の関連性に触れる。

本県の発掘調査は、黄褐色土層（当地では千曳浮石）を遺構の最終確認面とし、調査終了となる事例が圧倒的に多い。千曳浮石の年代は、縄文時代草創期の隆起線文土器の下層、すなわち13,000年前頃とされているから、これよりも下層に位置する縄文時代草創期や旧石器時代の有無は、黄褐色土に試掘溝を設けるか、黄褐色土以下まで掘り込まれた遺構の壁面や底面を数多く観察するなどの方法によりが判断されていると思われる。

今回、上野遺跡では、浪岡地区では最古級となる縄文時代早期中葉に遡る土器片の存在や円筒上層e式期の集落ほか、熊沢溜池遺跡からも深く掘り込まれた平安時代の大溝が発見されるなど、考古と地層の関係を整理する必要性が生じた。そのため、各遺跡において黄褐色土下50～100cm程まで土壤を採取・分析したところ、一部の地層においてテフラ・材質・花粉・放射性炭素年代を明確にし得た（2章2節・6章2節）。とりわけ、黄褐色土直下の灰白色粘土層の放射性炭素年代のまとまり（上野遺跡： $14,565 \pm 45$ yrBP±1σ、熊沢溜池遺跡： $15,460 \pm 40$ yrBP±1σ）、および当時の環境（トウヒ属主体の亜寒帯性針葉樹林、カバノキ属の増加傾向、湿地性のハンノキ属とツツジ科の存在）、更にその直下に位置する褐色粘土の年代（上野遺跡： $22,070 \pm 70$ yrBP±1σ）が注目される。今後、周辺地域の成果も加えることにより、更に考古と地質の具体的な関係が明らかになると考える。

青森市浪岡地区（旧浪岡町）における遺跡の発掘調査件数の多さと面積の広さは、県内有数規模であり、本県の歴史を語る上で数多くの歴史資料を提供していることは良く知られている。近年、西部地区の充実が著しく、この度の成果もその一つとなろう。ただ、浪岡地区では平安時代以降の発見が圧倒的に多く、縄文時代早期以前の発見は極めて少ない。過去の人的活動が本当に乏しかったのか、今後の課題である。

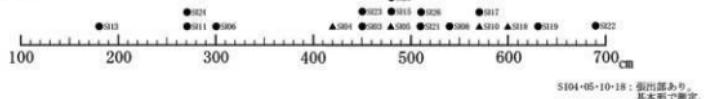
（佐藤）

堅穴部

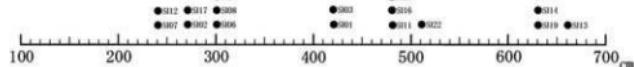
熊沢溜池遺跡 横



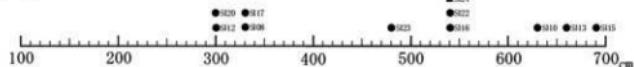
熊沢溜池遺跡 横

S104・10・18 : 強出部あり。
基本形で測定。

上野遺跡 横



上野遺跡 横

S124: 強出部あり。
基本形で測定。

掘立部

熊沢溜池遺跡 横

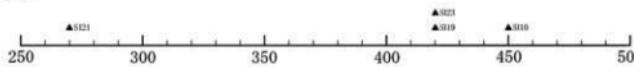


S110 : 推定値。

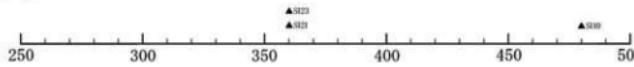
熊沢溜池遺跡 横

S110 : 強出部あり。
基本形で測定。

上野遺跡 横

S110 : 推定値。
S119 : 360.0-440cm と推定。

上野遺跡 横



S110 : 推定値。

図1 堅穴部と掘立部の規模(熊沢溜池遺跡・上野遺跡)

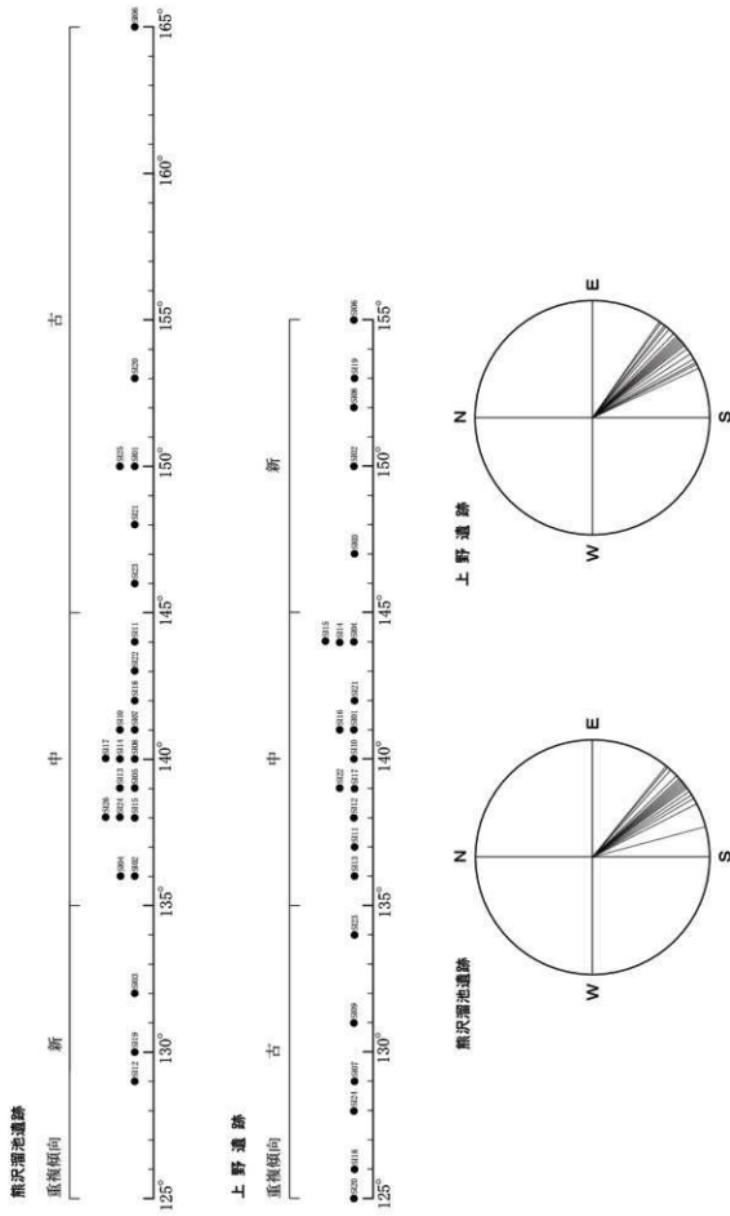


図2 堪穴建物跡の主軸方向（熊沢溜池遺跡・上野遺跡）

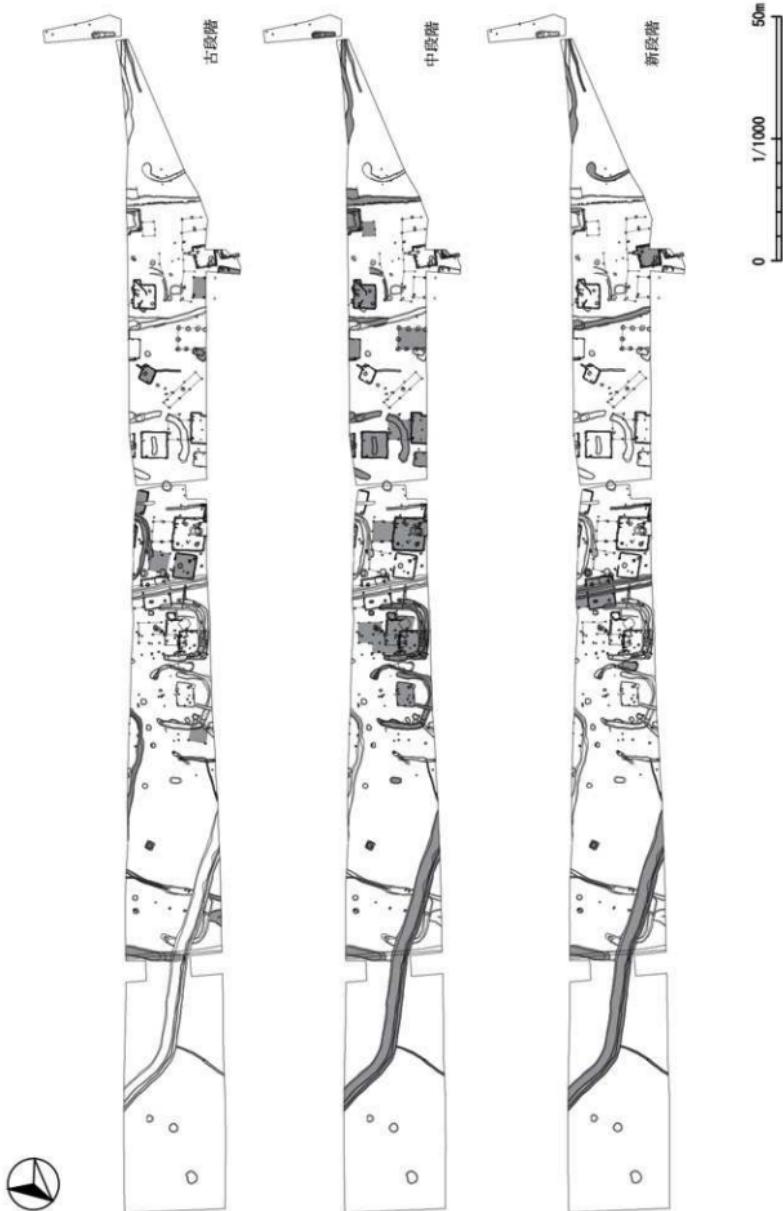


図3 平安時代中期の遺構変遷案(熊沢溜池遺跡)

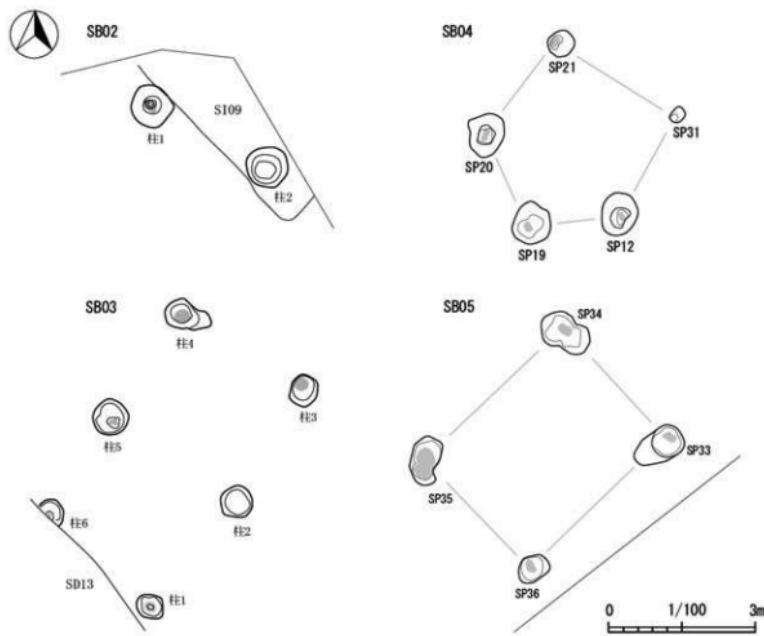
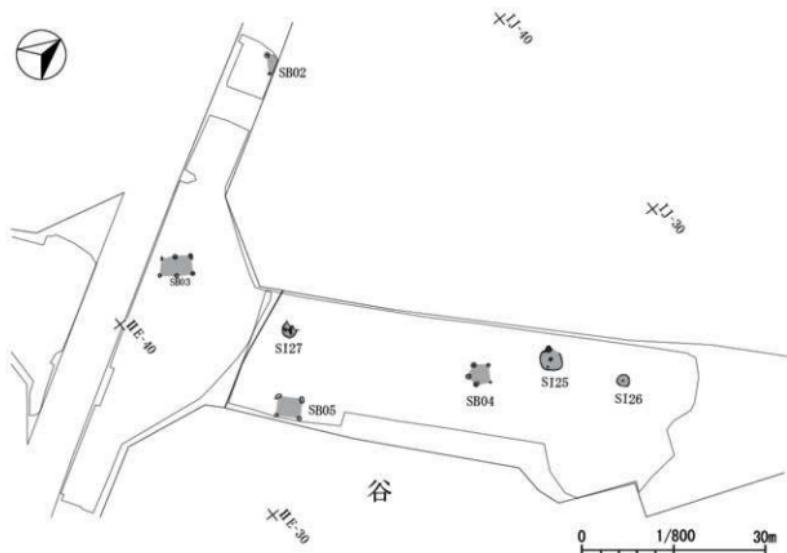


図4 繩文時代中期中葉と推定される遺構(上野遺跡)

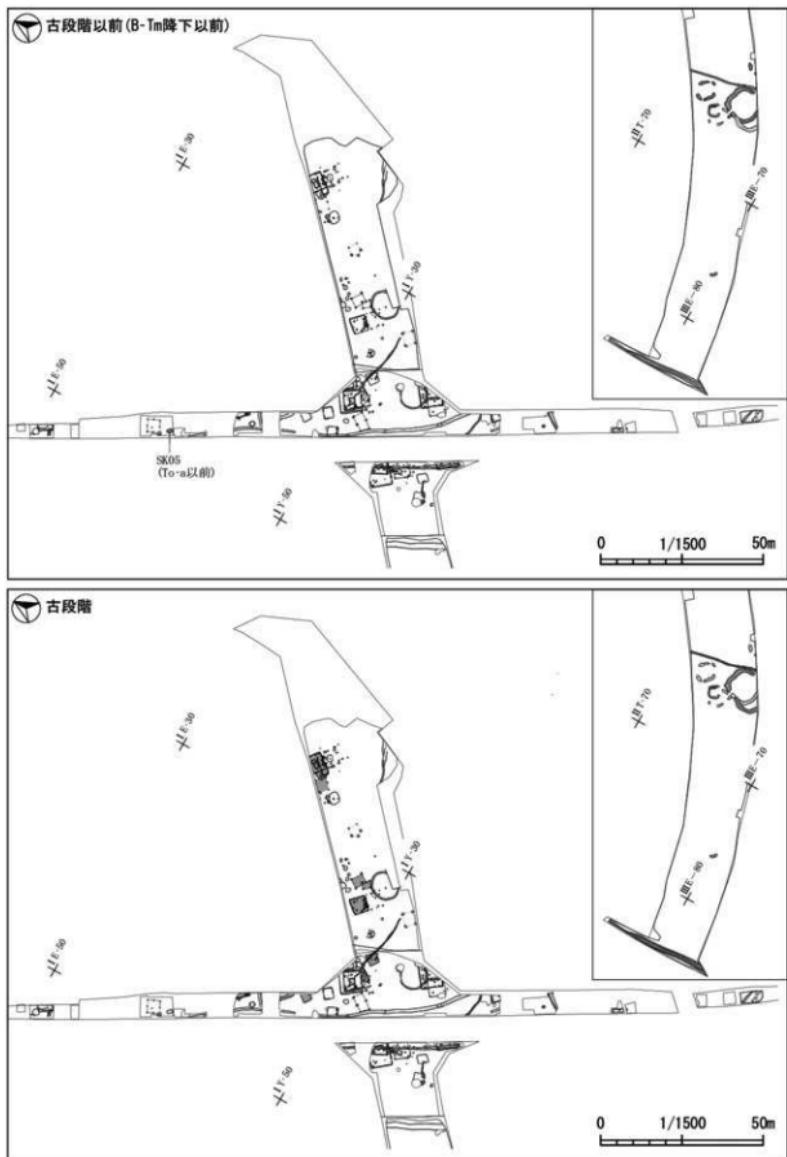


図5 平安時代中期の造構変遷案①(上野・郷山前遺跡)

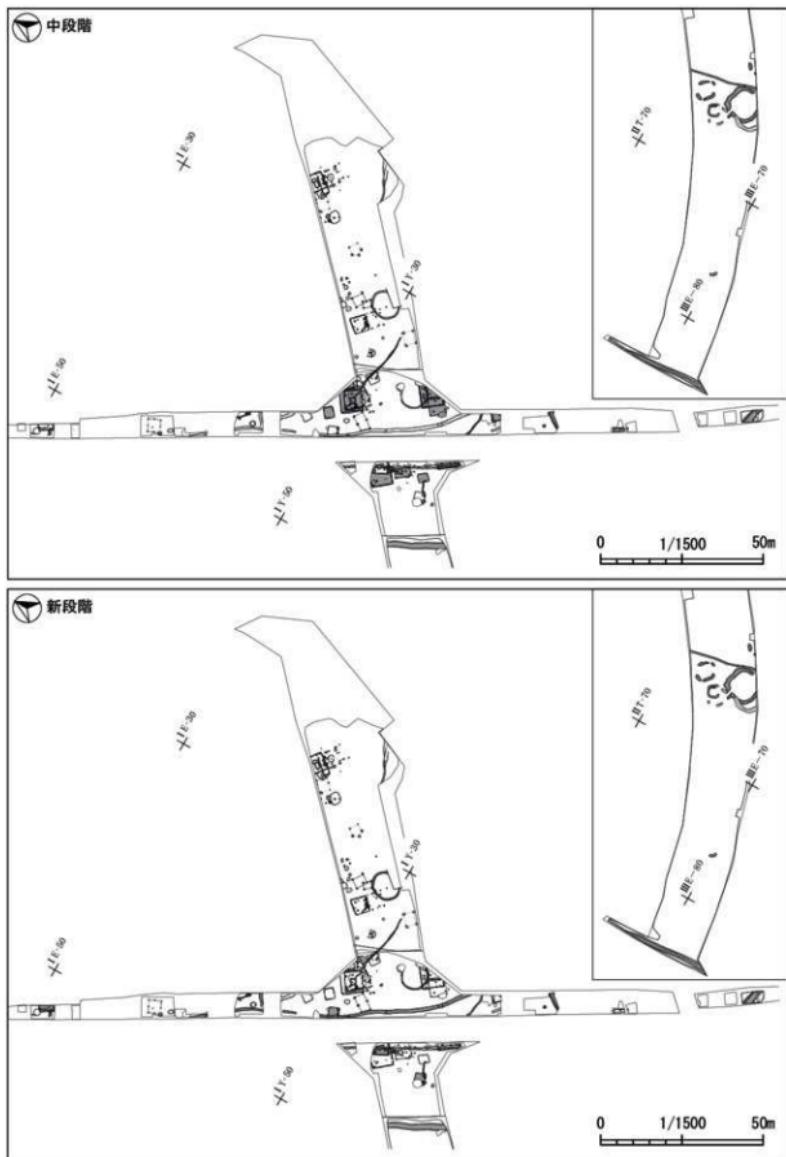


図6 平安時代中期の遺構変遷案②(上野・郷山前遺跡)

上野

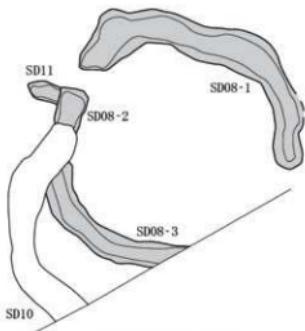


第1号円形周溝

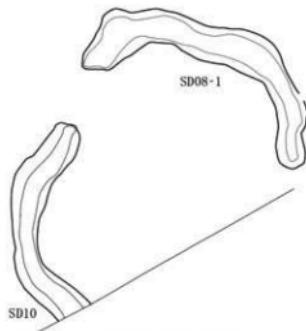


第2号円形周溝

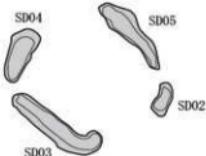
郷山前村元



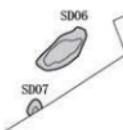
第3号円形周溝(古)



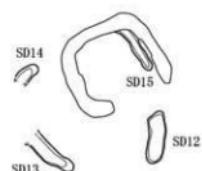
第3号円形周溝(新)



第1号円形周溝



第2号円形周溝



第4号円形周溝(古)



第4号円形周溝(新)

・網掛はB-Tmの層状堆積を示す。
・郷山前村元遺跡の第4号円形周溝は、新古とも覆土の削平が著しい。

0 1/200 6m

図7 円形周溝一覧(上野・郷山前村元遺跡)

	环	甕・壺	須恵器
古層	S021 B-1a 下層		
	S106		
	S121		
	S125		
	S011		
	S019		
	S115		
中層	S115 外周溝		
	S105		
	S107		
	S108		
	S110		
	S122		
	S010c 裏面		
新層	S103		
	S220 上部人 為塔積 燒土層 上部		
参考	S003		

図8 熊沢溜池遺跡土師器・須恵器集成

	环	茎・盖	頂部器
S109	 S10-10		
S110	 S42-7 S42-5	 S42-9 S42-4 S42-1	
S111	 S42-1 S42-6	 S42-6	
S112	 S42-2		
S113		 S2-2 S2-3	
S114		 S2-4 S2-3 S2-2	
S115			
S116		 S22-10 S22-9 S22-7	
S117	 S22-2 S22-4	 S22-11 S22-9 S22-7	
S118	 S22-3 S22-5	 S22-12 S22-11 S22-9	
S119	 S22-6 S22-8	 S22-10 S22-9 S22-7	
S120	 S22-1		
S121		 S22-1 S22-3 S22-5	
S122		 S22-11 S22-9 S22-7	
S123		 S22-10 S22-9 S22-7	
S124		 S22-4 S22-3 S22-2	
S125			
S126			
S127			
S128			
S129			
S130			
S131			
S132			
S133			
S134			
S135			
S136			
S137			
S138			
S139			
S140			
S141			
S142			
S143			
S144			
S145			
S146			
S147			
S148			
S149			
S150			
S151			
S152			
S153			
S154			
S155			
S156			
S157			
S158			
S159			
S160			
S161			
S162			
S163			
S164			
S165			
S166			
S167			
S168			
S169			
S170			
S171			
S172			
S173			
S174			
S175			
S176			
S177			
S178			
S179			
S180			
S181			
S182			
S183			
S184			
S185			
S186			
S187			
S188			
S189			
S190			
S191			
S192			
S193			
S194			
S195			
S196			
S197			
S198			
S199			
S200			
S201			
S202			
S203			
S204			
S205			
S206			
S207			
S208			
S209			
S210			
S211			
S212			
S213			
S214			
S215			
S216			
S217			
S218			
S219			
S220			
S221			
S222			
S223			
S224			
S225			
S226			
S227			
S228			
S229			
S230			
S231			
S232			
S233			
S234			
S235			
S236			
S237			
S238			
S239			
S240			
S241			
S242			
S243			
S244			
S245			
S246			
S247			
S248			
S249			
S250			
S251			
S252			
S253			
S254			
S255			
S256			
S257			
S258			
S259			
S260			
S261			
S262			
S263			
S264			
S265			
S266			
S267			
S268			
S269			
S270			
S271			
S272			
S273			
S274			
S275			
S276			
S277			
S278			
S279			
S280			
S281			
S282			
S283			
S284			
S285			
S286			
S287			
S288			
S289			
S290			
S291			
S292			
S293			
S294			
S295			
S296			
S297			
S298			
S299			
S300			
S301			
S302			
S303			
S304			
S305			
S306			
S307			
S308			
S309			
S310			
S311			
S312			
S313			
S314			
S315			
S316			
S317			
S318			
S319			
S320			
S321			
S322			
S323			
S324			
S325			
S326			
S327			
S328			
S329			
S330			
S331			
S332			
S333			
S334			
S335			
S336			
S337			
S338			
S339			
S340			
S341			
S342			
S343			
S344			
S345			
S346			
S347			
S348			
S349			
S350			
S351			
S352			
S353			
S354			
S355			
S356			
S357			
S358			
S359			
S360			
S361			
S362			
S363			
S364			
S365			
S366			
S367			
S368			
S369			
S370			
S371			
S372			
S373			
S374			
S375			
S376			
S377			
S378			
S379			
S380			
S381			
S382			
S383			
S384			
S385			
S386			
S387			
S388			
S389			
S390			
S391			
S392			
S393			
S394			
S395			
S396			
S397			
S398			
S399			
S400			
S401			
S402			
S403			
S404			
S405			
S406			
S407			
S408			
S409			
S410			
S411			
S412			
S413			
S414			
S415			
S416			
S417			
S418			
S419			
S420			
S421			
S422			
S423			
S424			
S425			
S426			
S427			
S428			
S429			
S430			
S431			
S432			
S433			
S434			
S435			
S436			
S437			
S438			
S439			
S440			
S441			
S442			
S443			
S444			
S445			
S446			
S447			
S448			
S449			
S450			
S451			
S452			
S453			
S454			
S455			
S456			
S457			
S458			
S459			
S460			
S461			
S462			
S463			
S464			
S465			
S466			
S467			
S468			
S469			
S470			
S471			
S472			
S473			
S474			
S475			
S476			
S477			
S478			
S479			
S480			
S481			
S482			
S483			
S484			
S485			
S486			
S487			
S488			
S489			
S490			
S491			
S492			
S493			
S494			
S495			
S496			
S497			
S498			
S499			
S500			
S501			
S502			
S503			
S504			
S505			
S506			
S507			
S508			
S509			
S510			
S511			
S512			
S513			
S514			
S515			
S516			
S517			
S518			
S519			
S520			
S521			
S522			
S523			
S524			
S525			
S526			
S527			
S528			
S529			
S530			
S531			
S532			
S533			
S534			
S535			
S536			
S537			
S538			
S539			
S540			
S541			
S5			

圖 9 上野遺跡土師器・須恵器集成

東洋S=1/10 西・露S=1/15
東洋構名の矢印は新旧を示す

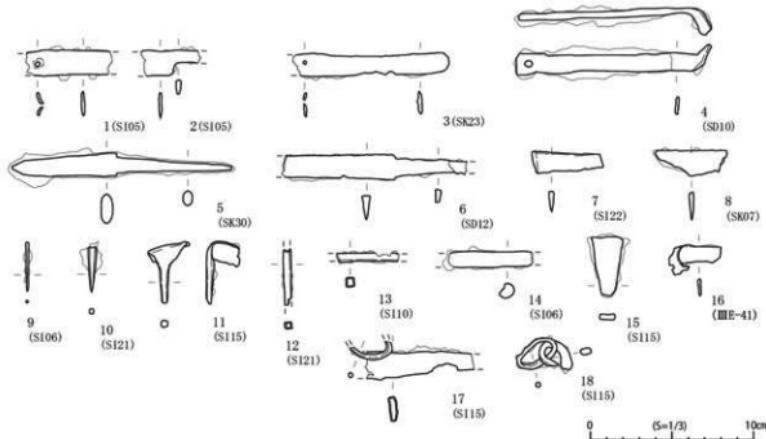


図10 熊沢溜池遺跡出土鉄製品集成

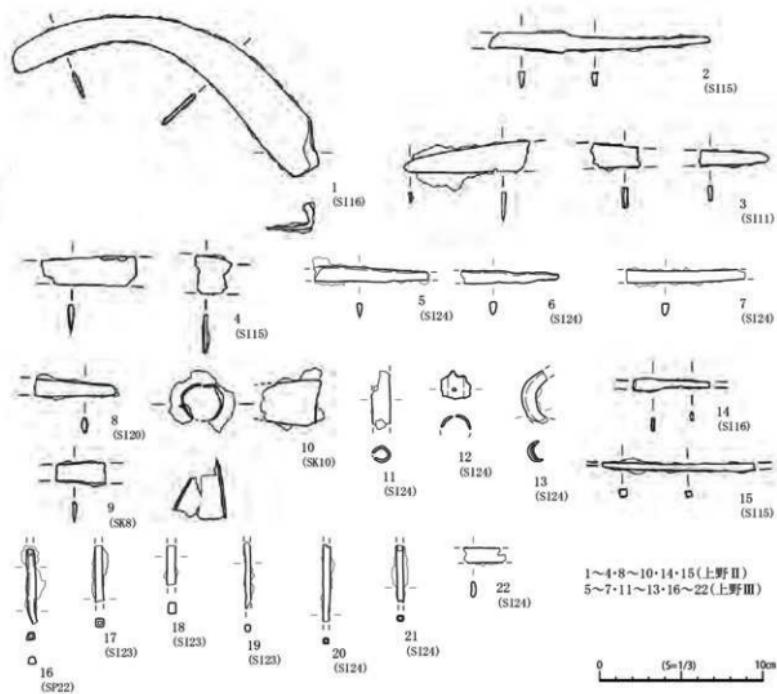


図11 上野遺跡出土鉄製品集成

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1981 「新納屋遺跡(2)」青森県埋蔵文化財調査報告書第62集
- 青森県教育委員会 1984 「下之切通り(小泊道)」青森県「歴史の道」調査報告書
- 青森県教育委員会 1985 「表蔵遺跡調査報告書Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第91集
- 青森県教育委員会 1995 「山元(2)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
- 青森県教育委員会 1995 「木本館跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第173集
- 青森県教育委員会 1998 「高屋敷館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 2001 「青森県遺跡詳細分布調査報告書XIII」青森県埋蔵文化財調査報告書第310集
- 青森県教育委員会 2001 「長瀬池遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第311集
- 青森県教育委員会 2003 「宮元遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第359集
- 青森県教育委員会 2004 「宮元遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第380集
- 青森県教育委員会 2008 「寺屋敷平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第450集
- 青森県教育委員会 2008 「上野遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第445集
- 青森県教育委員会 2009 「中平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第474集
- 青森県教育委員会 2010 「上野遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第486集
- 青森県教育委員会 2010 「中平遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第490集
- 青森県教育委員会 2012 「中平遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第518集
- 青森県教育委員会 2012 「青森県遺跡詳細分布調査報告書24」青森県埋蔵文化財調査報告書第523集
- 青森県教育委員会 2013 「青森県遺跡詳細分布調査報告書25」青森県埋蔵文化財調査報告書第536集
- 青森県教育委員会 2014 「青森県遺跡詳細分布調査報告書26」青森県埋蔵文化財調査報告書第549集
- 青森県教育委員会 2015 「下石川平野遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第556集
- 青森県教育委員会 2016 「下石川平野遺跡Ⅱ・旭(1)遺跡・旭(2)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第569集
- 青森県教育委員会 2017 「下石川平野遺跡Ⅲ・浪岡洪沢遺跡・旭(2)遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第583集
- 櫻井清彦・菊池徹夫編 1987 「蓬田大船遺跡」早稲田大学文学部考古学研究室報告
- 五所川原市教育委員会 2003 「五所川原須恵器窯跡」五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 五所川原市教育委員会 2005 「K-Y1号窯跡「五所川原須恵器窯跡」における初現期窯跡の発掘調査報告書」
- 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第26集
- 五所川原市教育委員会 2013 「十三盛遺跡」五所川原市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 浪岡町教育委員会 1990 「大沼遺跡」浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第4集
- 浪岡町 2000 「浪岡町史」第1巻
- 浪岡町 2002 「浪岡町史」別巻1
- 北海道伊達市教育委員会 1993 「有珠オヤコツ遺跡・ポンマ遺跡」
- 厚真町教育委員会 2011 「オニキシペ2遺跡」
- 福井流星 2004 「第111号住居跡出土ガラス玉について」「向田(35)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第373集
- 岩井浩人 2008 「津軽地域における古代土器食膳具の変遷-9世紀から11世紀を中心に-」「青山考古」第24号
- 伊藤隆夫・山田晶久 2012 「木の考古学」海賂社
- 横浜市歴史博物館 2014 「おにぎり展」出土資料から見た穀物の歴史

写 真 図 版

熊沢溜池遺跡



SI01 完掘 (S W→)



SI01 完掘 (上空→)



SI02 完掘 (上空→)

写真1 第1号竪穴建物跡・2号(1)



SI02 焼土炭化物範囲 (E→)



SI02 カマド SI12 土層断面 (N E→)

写真2 第2号竪穴建物跡 (2)



SI03 周辺 (上空→)



SI03 完掘 (NW→)

写真3 第3号竪穴建物跡（1）



SI03 焼失状況 (NW→)



SI03 土層断面 (NE→)

写真4 第3号竪穴建物跡 (2)



SI03 カマド検出状況 (NW→)



SI03 カマド検出状況 (NW→)



SI03 カマド土層断面 (SW→)



SI03 カマド完掘 (NW→)



SI03 内 Pit I (SE→)



SI03 カマド完掘 (NW→)



SI03 内 Pit I (SE→)

写真5 第3号竪穴建物跡 (3)

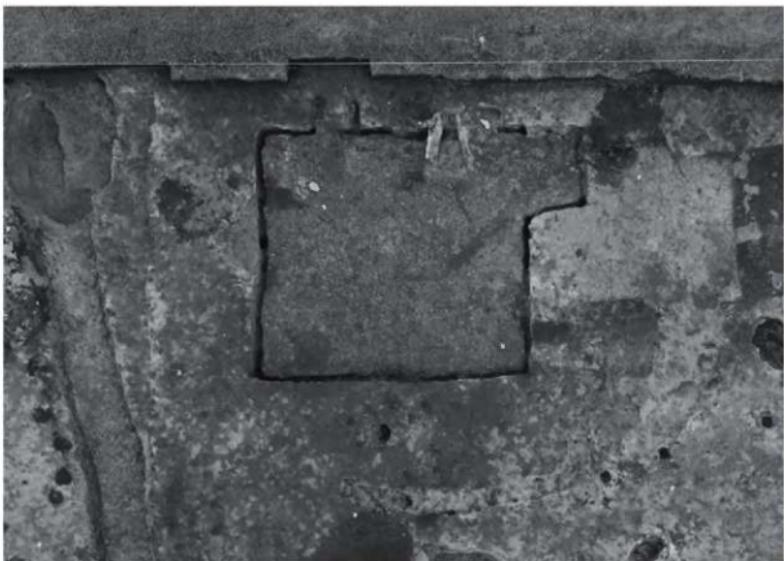


SI04 完掘 (W→)



SI04 貼床除去 (NW→)

写真6 第4号竪穴建物跡



SI05 完掘 (上空→)



SI05 完掘 (W→)

写真7 第5号竪穴建物跡（1）



SI05 壁穴部 (NW→)



SI05 貼床除去 (NW→)

写真8 第5号壁穴建物跡 (2)



SI05 土層断面 A-B (N E→)



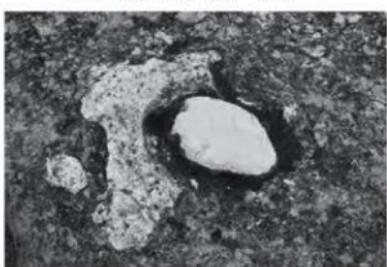
SI05 出入口部 (NW→)



SI05 カマド土層断面 (SW→)



SI05 出入口部土層断面 (W→)



SI05 白色粘土範囲 (NW→)

写真9 第5号竪穴建物跡 (3)



S106 完掘 (上空→)



S106 完掘 (N→)

写真10 第6号竪穴建物跡（1）



SI06 土層断面 (E→)



SI06 貼床除去状況 (N→)

写真11 第6号竪穴建物跡 (2)



SI06 カマド完掘 (N→)

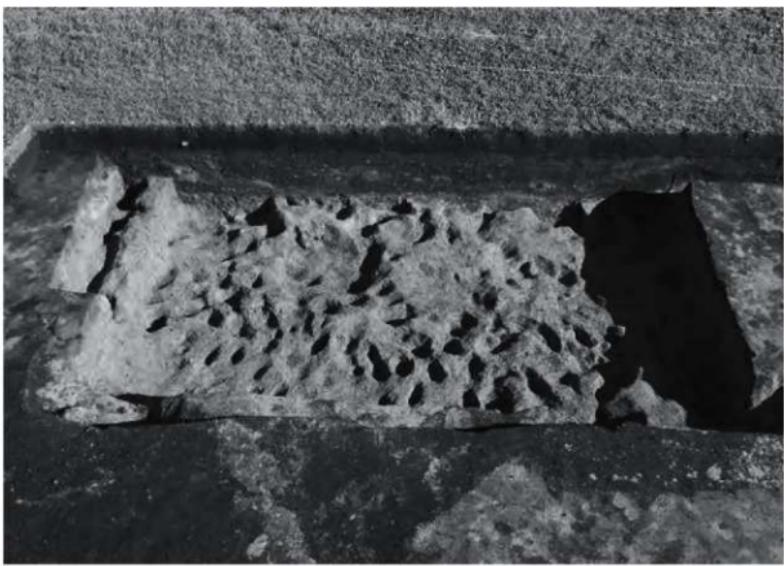


SI06 カマド土層断面 (W→)

写真12 第6号竪穴建物跡 (3)



SI07 遺物出土状況 図 49-1 (N→)



SI07 貼床除去 (NW→)

写真13 第7号竪穴建物跡



SI08 完掘 (上空→)



SI08 完掘 (N→)

写真14 第8号竪穴建物跡（1）



SI08 土層断面 (W→)



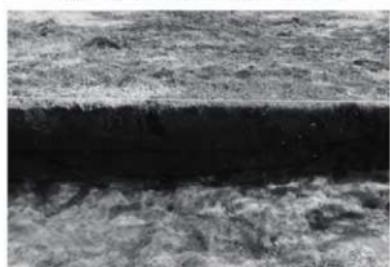
SI08 カマド完掘 (NW→)



SI08 カマド土器出土状況 (NW→)



SI08 カマド土層断面 (SW→)



SI08 外周溝土層断面 (NW→)

写真15 第8号竪穴建物跡 (2)



S110 完掘 (上空→)



S110 完掘 (NW→)

写真16 第10号竪穴建物跡（1）



SI10 貼床除去 (NW→)



SI10 土層断面 (S E→)

写真17 第10号竪穴建物跡 (2)



SI10 焼失状況 (NW→)

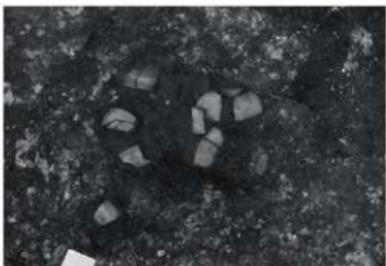


SI10 張出部周辺焼失状況 (NW→)

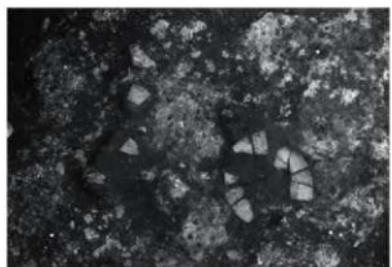
写真18 第10号竪穴建物跡 (3)



SI10 土器出土状況 図 50-2 (S→)



SI10 土器出土状況 図 50-1・4 (S→)



SI10 土器出土状況 図 50-2 (S→)



SI10 土器出土状況 図 50-5 (S→)



SI10 カマド周辺焼失状況 (NW→)

写真19 第10号竪穴建物跡 (4)



SI10 カマド完掘 (NW→)



SI10 カマド土層断面 (SW→)



SI10 土器出土状況 図 50-3・6・7 (S→)



SI10 カマド右脇掘方貼床除去 (NW→)



SI11 完掘 (上空→)

写真20 第10号竪穴建物跡 (5)



SI11 完掘 (NW→)



SI11 カマド完掘 (NW→)



SI11 カマド土層断面 (SW→)



SI11 土層断面 (SE→)



SI11 貼床除去 (NW→)

写真21 第11号竪穴建物跡



SI13 完掘 (NW→)



SI13 土層断面 (NW→)

写真22 第13号竪穴建物跡



SI15 完掘（上空→）



SI15 完掘（NW→）

写真23 第15号竪穴建物跡（1）



SI15 貼床除去 (NW→)



SI15 土層断面 (NW→)



SI15 カマド土層断面 (SW→)



SI15 土器出土状況 図 50-13 (SW→)

写真24 第15号竪穴建物跡 (2)



SI15 SD02 南東先端焼土・炭化物 (NW→)



SI15 SD02 南東先端焼土・炭化物 (NW→)



SI15 SD02 土層断面 E-E' (NW→)



SI15 SD01A-A' 土層断面 (NW→)



SI15 SD01 炭化物出土状況 (NW→)

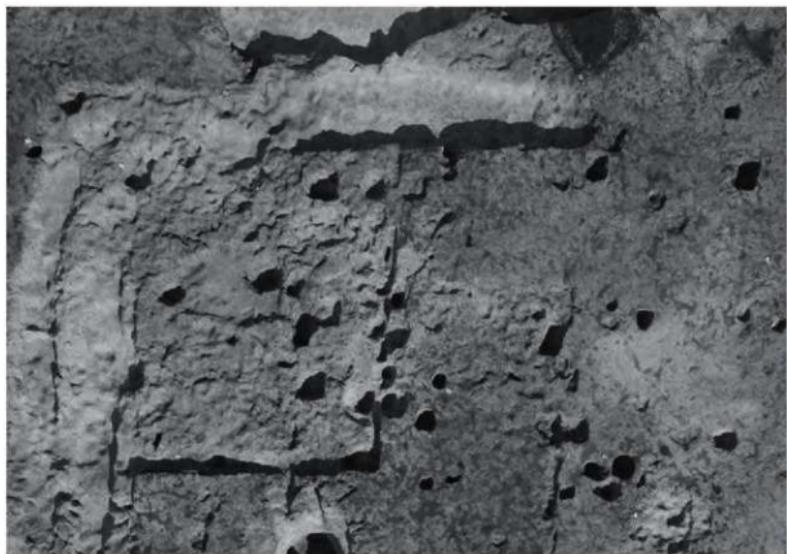


SI15 SD01 炭化物出土状況 (NW→)



SI15 SD01 炭化物出土状況 (NW→)

写真25 第15号竪穴建物跡 (3)



SI17 完堀（上空→）



SI17 完堀（NW→）

写真26 第17号竪穴建物跡（1）



SI17 貼床除去 (NW→)



SI17 カマド完掘 (NW→)



SI17 土層断面 (N E→)



SI17 カマド袖部土層断面 (NW→)



SI17 外周溝土玉出土状況 (E→)

写真27 第17号竪穴建物跡 (2)



SI18 完堀 (上空→)



SI18 完堀 (NW→)

写真28 第18号竪穴建物跡 (1)

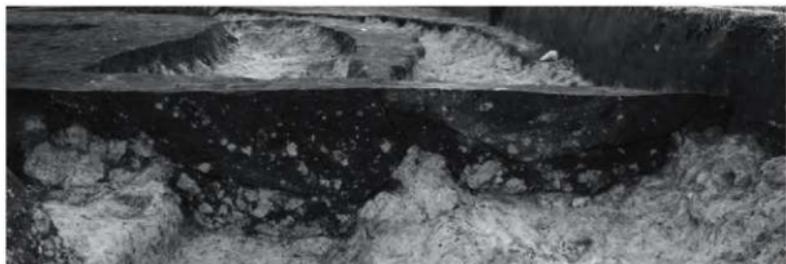


SI18 完掘 (S E→)



SI18 貼床除去 (NW→)

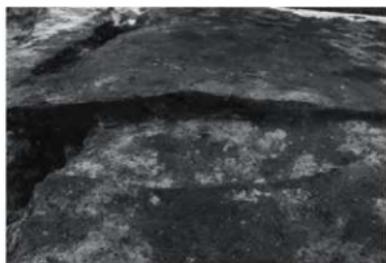
写真29 第18号竪穴建物跡 (2)



SI18 外周溝 C-C' 土層断面 (N E→)



SI18 外周溝D-D' 土層断面 (NW→)



SI18 カマド土層断面 (N E→)



SI18 外周溝遺物出土状況 (NW→)



SI18 外周溝遺物出土状況 (NW→)



SI18 外周溝遺物出土状況 (NW→)

写真30 第18号竪穴建物跡 (3)



SI19 完堀 (上空→)



SI19 完堀 (NW→)

写真31 第19号竪穴建物跡



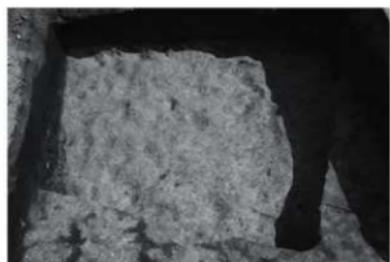
SI20 東側完掘 (NW→)



SI20 西側完掘 (NW→)



SI20 東側貼床除去 (NW→)



SI20 西側貼床除去 (NW→)



SI20 東側土層断面 (NW→)



SI20 西側土層断面 (NW→)

写真32 第20号竪穴建物跡



S121 完掘 (上空→)



S121 完掘 (NW→)

写真33 第21号竪穴建物跡（1）



SI21 貼床除去 (NW→)



SI21 土層断面 (N E→)



SI21 土層断面 (S E→)

写真34 第21号竪穴建物跡（2）



SI21 カマド遺物出土状況 (NW→)



SI21 カマド土層断面 (NE→)



SI21 SK01 土層断面 (N→)

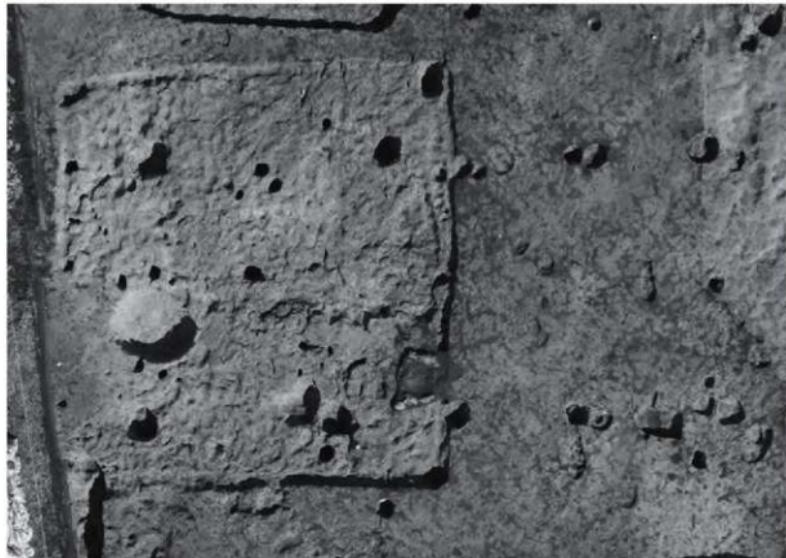


SI21 遺物出土状況 図 54-3・4・6 (NW→)



SI21 遺物出土状況 図 54-2 (N→)

写真35 第21号竪穴建物跡 (3)



S122 完掘 (上空→)



S122 完掘 (NW→)

写真36 第22号竪穴建物跡（1）



SI22 完掘 (S E→)



SI22 貼床除去 (NW→)

写真37 第22号竪穴建物跡 (2)



SI22 カマド完掘 (NW→)



SI22 カマド確認状況 (NW→)



SI22 カマド確認状況 (NW→)



SI22 カマド完掘 (NW→)



SI22 カマド土層断面 (NE→)



SI22 カマド土層断面 (NE→)

写真38 第22号竪穴建物跡 (3)



SI22 土層断面 (S W→)



SI22 土層断面 (S E→)



SI22 炭化材出土状況 (S→)



SI22 炭化材出土状況 C-12・13 (S→)



SI22 内SK01 土器出土状況 (E→)



SI22 内SK01 完掘 (E→)

写真39 第22号竪穴建物跡 (4)



SI23 完掘 (上空→)



SI23 土層断面 (W→)

写真40 第23号竪穴建物跡



S124 完掘 (NW→)



S124 カマド完掘 (NW→)

写真41 第24号竪穴建物跡（1）



SI24・SI25 土層断面 (S E→)



SI25 完掘 (NW→)



SI25 カマド完掘 (S E→)

写真42 第24号竪穴建物跡(2)・第25号竪穴建物跡(1)



SI25 遺物出土状況 (E→)



SI25 遺物出土状況 (SE→)



SI25 遺物出土状況 図 56-1 (SE→)



SI26 完掘 (NW→)

写真43 第25号竪穴建物跡(2)・第26号竪穴建物跡



SA01 完掘 (NW→)



SA01 土層断面 (NW→)

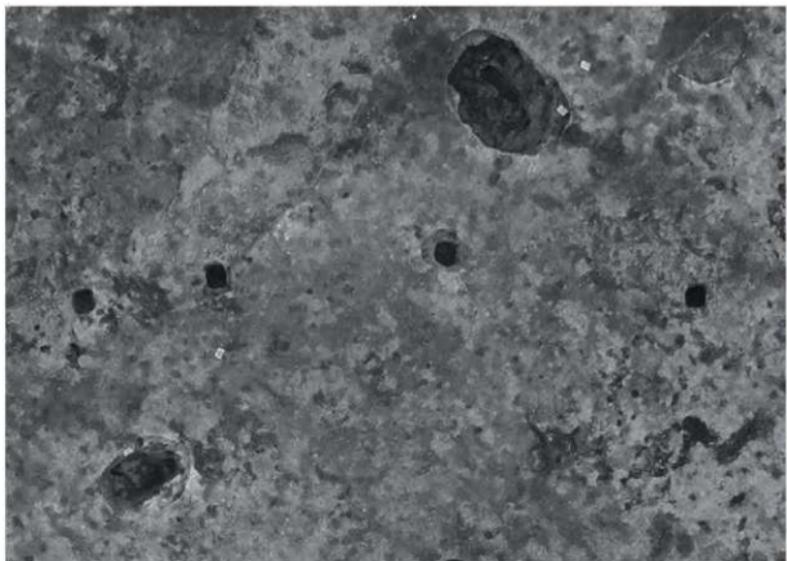


SA02 完掘 (上空→)



SA02周辺 (上空→)

写真44 塙跡 (1)



SA03 (上空→)



SA04 (上空→)

写真45 塙跡 (2)



SB01 (上空→)



SB01 pit1 土層断面 (SE→)



SB01 pit2 土層断面 (SW→)

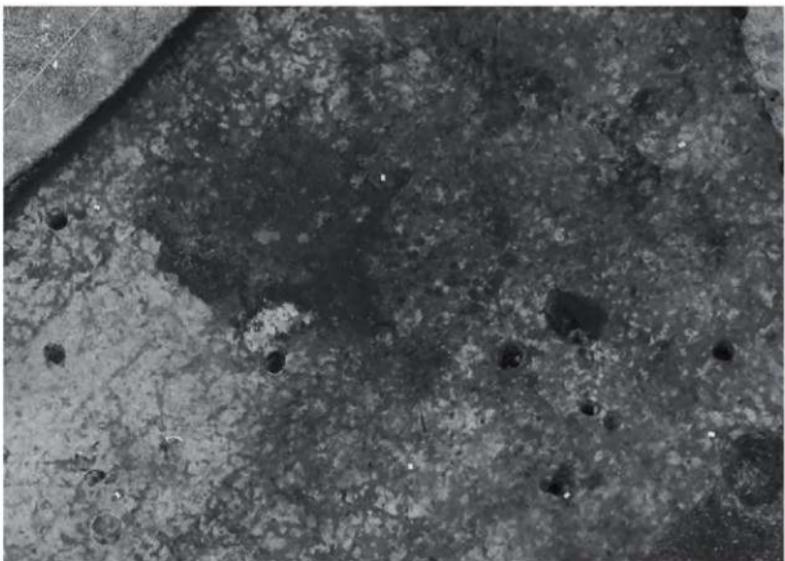


SB01 pit3 土層断面 (W→)



SB01 pit4 土層断面 (S→)

写真46 掘立柱建物跡 (1)



SB02 (上空→)



SB04 (上空→)

写真47 挖立柱建物跡（2）



SD01 SD02 完掘 (N→)



SD03 完掘 (N→)



SD03 土層断面 (NW→)



SD03 土層断面 (SW→)

写真48 溝跡 (1)



SD04 完掘 (S E→)



SD07 完掘 (S E→)



SD07 土層断面 (S E→)



SD07 完掘 (NW→)



SD09 土層断面 (NW→)

写真49 溝跡 (2)



SD10 (上空→)



SD10 A-A' 土層断面 (SW→)



SD10 A-A' 北東側土層断面 (SW→)



SD10 A-A' 南東側土層断面 (SW→)

写真50 溝跡 (3)



SD10 東側完掘 (N E→)



SD10 C-C' 土層断面 (W→)

写真51 溝跡 (4)



SD11 (上空→)



SD11 北西隅遺物出土状況 (NW→)



SD13 土層断面 (E→)



SD14・SA04 完掘 (N→)

写真52 溝跡 (5)



SD14 完掘 (N→)



SD16 完掘 (S E→)



SD14 土層断面 (S E→)



SD16 完掘 (NW→)

写真53 溝跡 (6)



SD17 (上空→)



SD17 土層断面 (S E→)



SD19 (上空→)



SD19 遺物出土状況 (N→)



SD19 遺物出土状況 図58-3・4・5 (W→)

写真54 溝跡 (7)



SD19 土層断面 (N→)



SD20 土層断面 (S E→)



SD20 (上空→)



SD21 A-A' 土層断面 (S E→)



SD21 B-B' 土層断面 (N W→)

写真55 溝跡 (8)



SD21 (上空→)



SD22 (上空→)



SD22 土層断面 (S E→)



SD23 (上空→)

写真56 溝跡 (9)



SD24 完掘 (S E→)



SD25 A-A' 土層断面 (S E→)



SD25 B-B' 土層断面 (NW→)



SD25 完掘 (S E→)



SD25 完掘 (NW→)

写真57 溝跡 (10)



SD26 完掘 (N E→)



SD26 土層断面 (S E→)



SD27・28 完掘 (S E→)



SD29 完掘 (S E→)



SD29 完掘 (NW→)

写真58 溝跡 (11)



SD39 土層断面 (S W→)



SD30 土層断面 (S E→)



SD30 完掘 (S→)



SD31 完掘 (NW→)

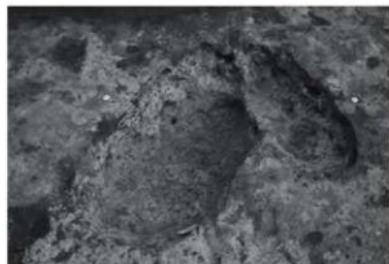


SD31 遺物出土状況 (NW→)



SD31 土層断面 (NW→)

写真59 溝跡 (12)



SK05 完掘 (NW→)



SK05 土層断面 (NW→)



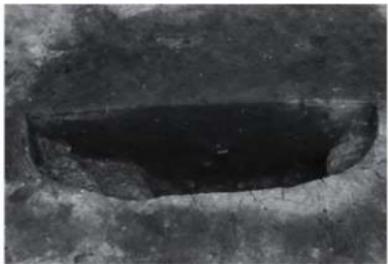
SK07 土層断面 (S→)



SK12 人為堆積土 (S→)



SK12 完掘 (S→)



SK12 土層断面 (S→)



SK14 完掘 (NE→)

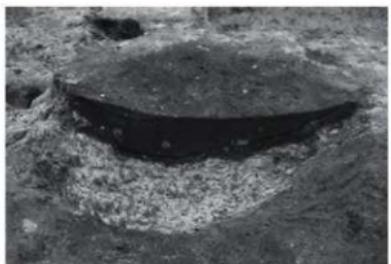


SK14 土層断面 (NE→)

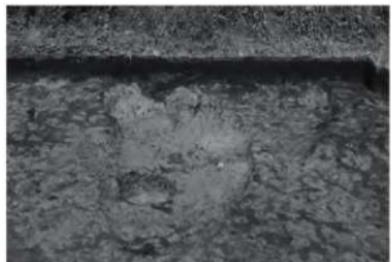
写真60 土坑 (1)



SK19 完掘 (N E→)



SK19 土層断面 (N E→)



SK21・SK22 完掘 (S E→)



SK21・SK22 土層断面 (N→)



SK23 土層断面 (N E→)



SK24 土層断面 (NW→)



SK25 完掘 (E→)



SK25 土層断面 (E→)

写真61 土坑 (2)



SK26・SP91 土層断面 (NW→)



SK27 土層断面 (SW→)



SK28 遺物出土状況 (NW→)



SK28 遺物出土状況 (NW→)



SK28 遺物出土状況 図60-2・5・6 (NW→)

写真62 土坑 (3)



SK28 烧土範囲 (NW→)



SK28 烧土塊出土狀況 (NW→)



SK28 土層断面上部 (NW→)



SK28 完掘 (NW→)



SK28 土層断面下部 (NW→)

写真63 土坑 (4)



SK29 遺物出土状況 (NW→)



SK29 土層断面 (NW→)



SK29 焼土・炭化物出土状況 (NW→)



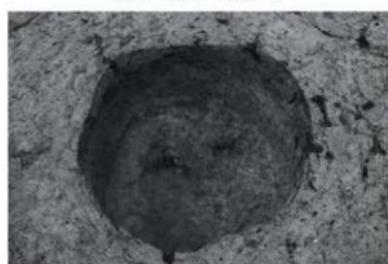
SK29 完掘 (NW→)



SK30 完掘 (SE→)



SK30 土層断面 (SE→)

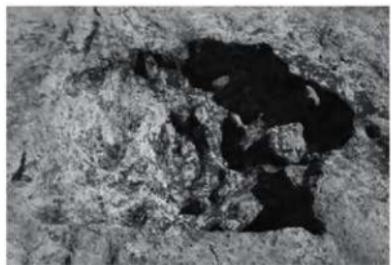


SK31 完掘 (NW→)



SK31 土層断面 (NW→)

写真64 土坑 (5)



SK32 完掘 (NW→)



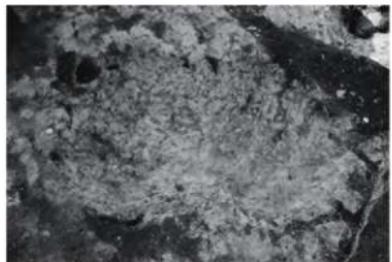
SK32 土層断面 (NW→)



SK33 完掘 (NW→)



SK33 土層断面 (NW→)



SK36 完掘 (W→)



SK36 土層断面 (W→)

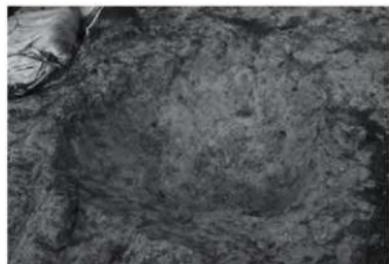


SK38 完掘 (S E→)



SK38 土層断面 (S E→)

写真65 土坑 (6)



SK39 完掘 (SW→)



SK39 土層断面 (SW→)



SK42 完掘 (NW→)



SK42 土層断面 (NW→)



SK43 完掘 (NW→)



SK43 土層断面 (NW→)



SK44 焼土出土状況 (SW→)

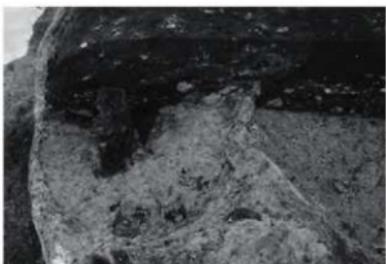


SK44 土層断面 (SW→)

写真66 土坑 (7)



SK45 完掘 (NW→)



SK45 土層断面 (NW→)



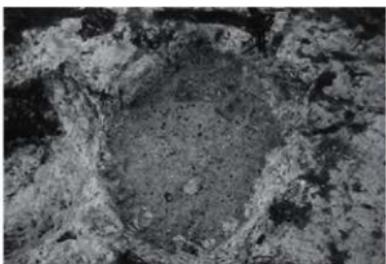
SK45 炭化穀物塊出土状況 (NW→)



SK48 完掘 (E→)



SK48 土層断面 (S E→)



SK49 完掘 (NW→)



SK49 挖方 (NW→)



SK49 土層断面 (NW→)

写真67 土坑 (8)



SK50 土層断面 (NW→)



SK51・52 土層断面 (NW→)



SK53 完掘 (NE→)



SK53 土層断面 (N E→)



SK55 完掘・土層断面 (NW→)



SK56 完掘・土層断面 (S E→)



SK57 完掘 (N→)



SK57 土層断面 (N E→)

写真68 土坑 (9)



SK58 完掘 (NW→)



SK58 土層断面 (NW→)



SK57・58 (NE→)



SK59 完掘 (NW→)



SK59 土層断面 (NW→)

写真69 土坑 (10)



SE01 土層断面 (NW→)



SE02 土層断面 (SW→)

写真70 井戸跡



46 - 1



46 - 2



46 - 4



46 - 3



46 - 5



46 - 6



46 - 7

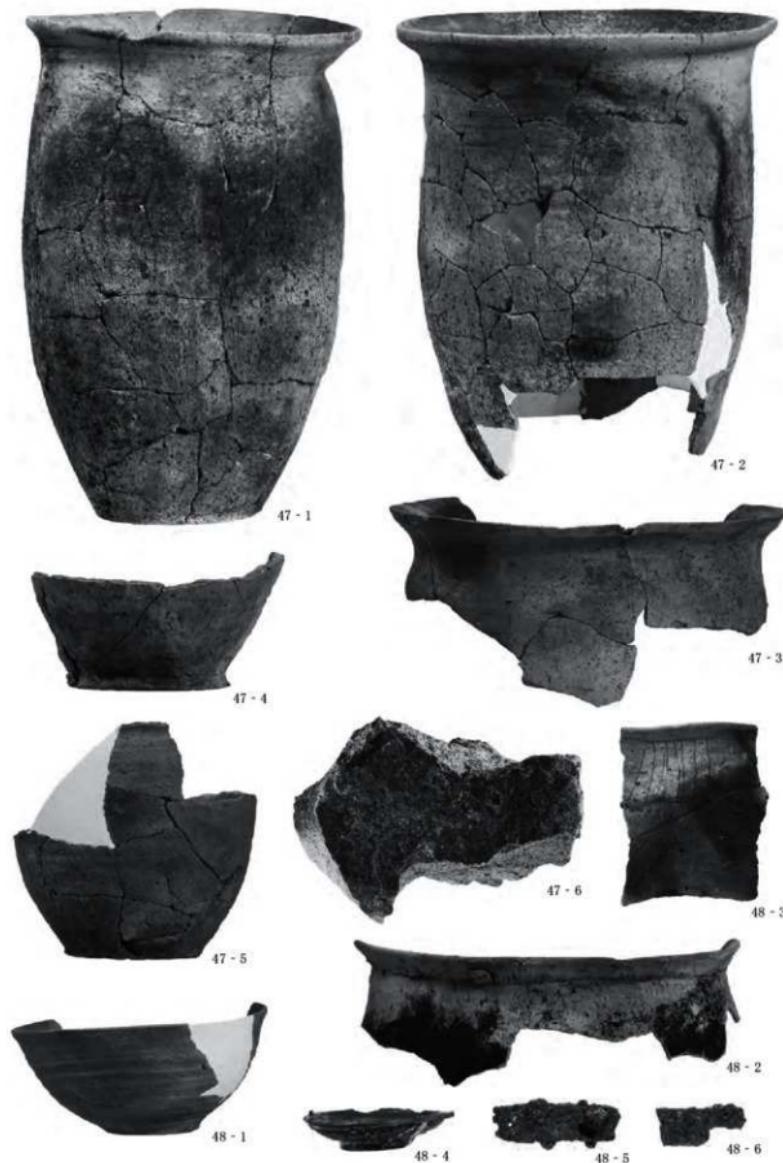


46 - 8

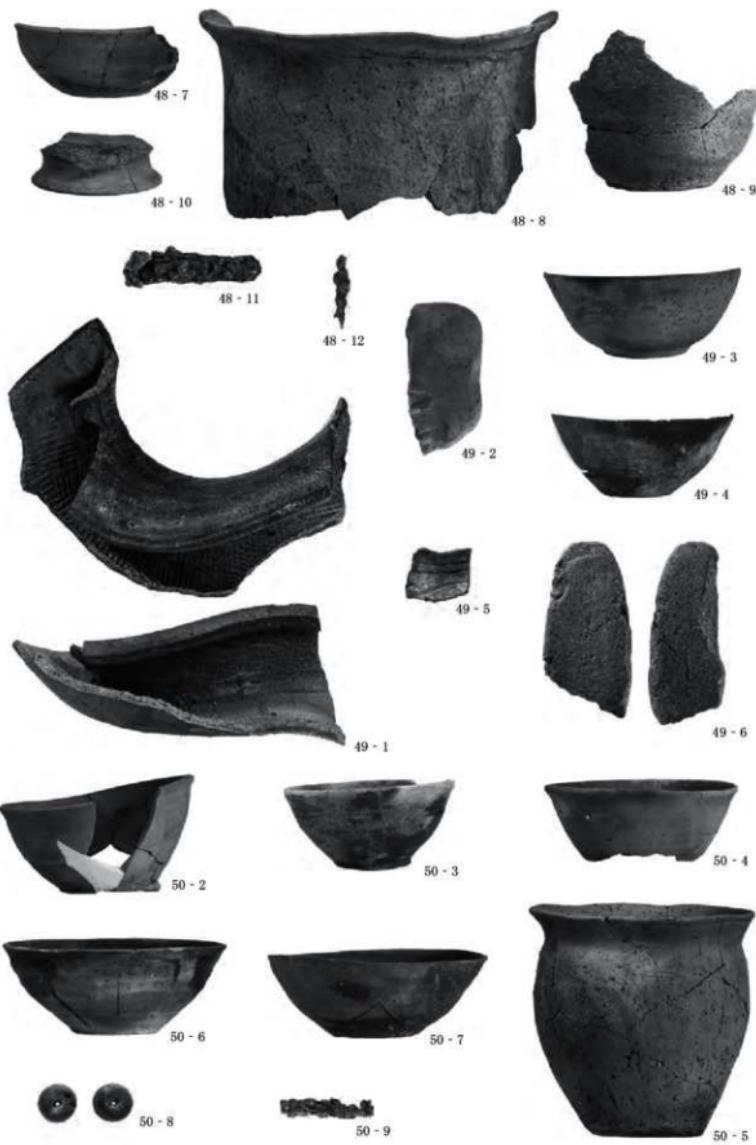


46 - 9

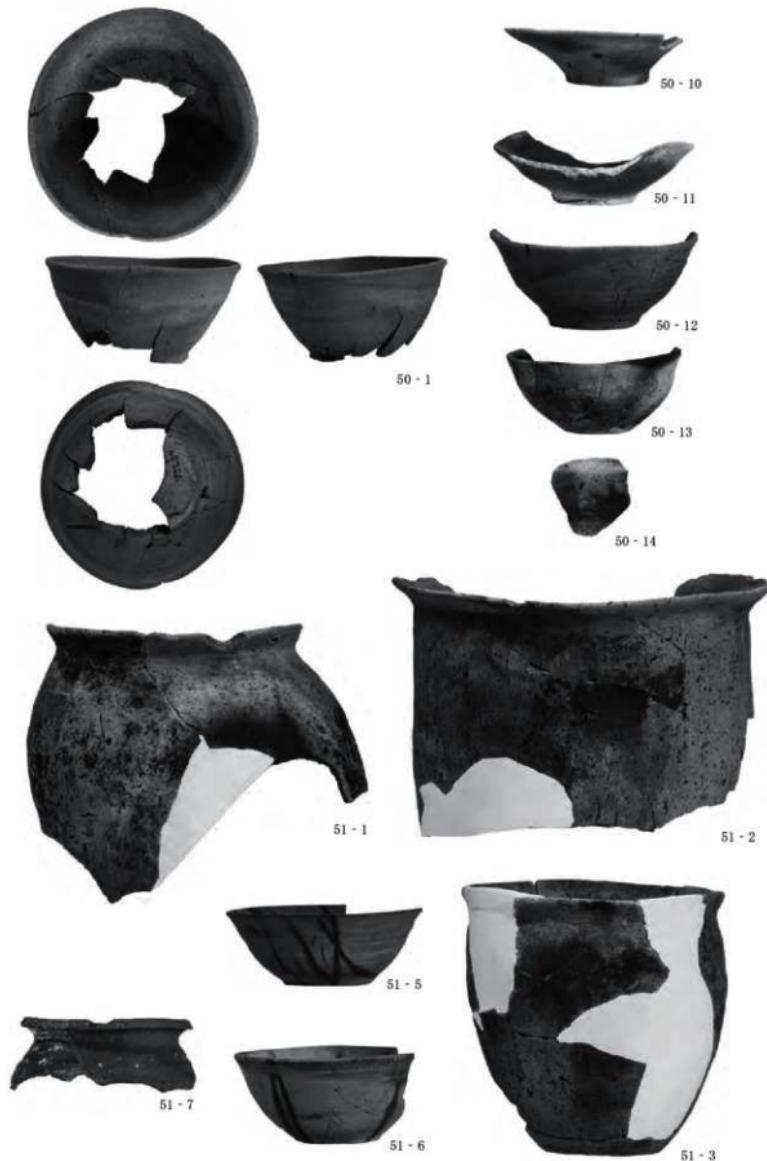
圖版71 出土遺物 1



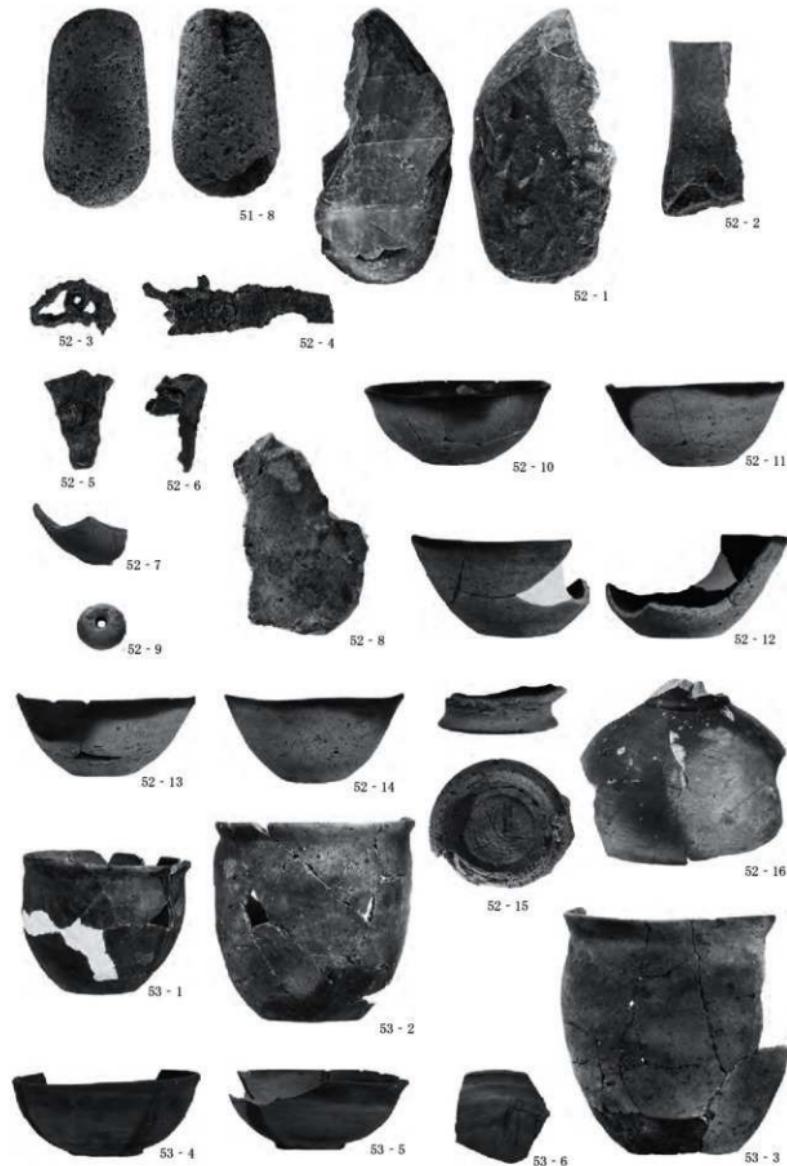
図版72 出土遺物2



圖版73 出土遺物3



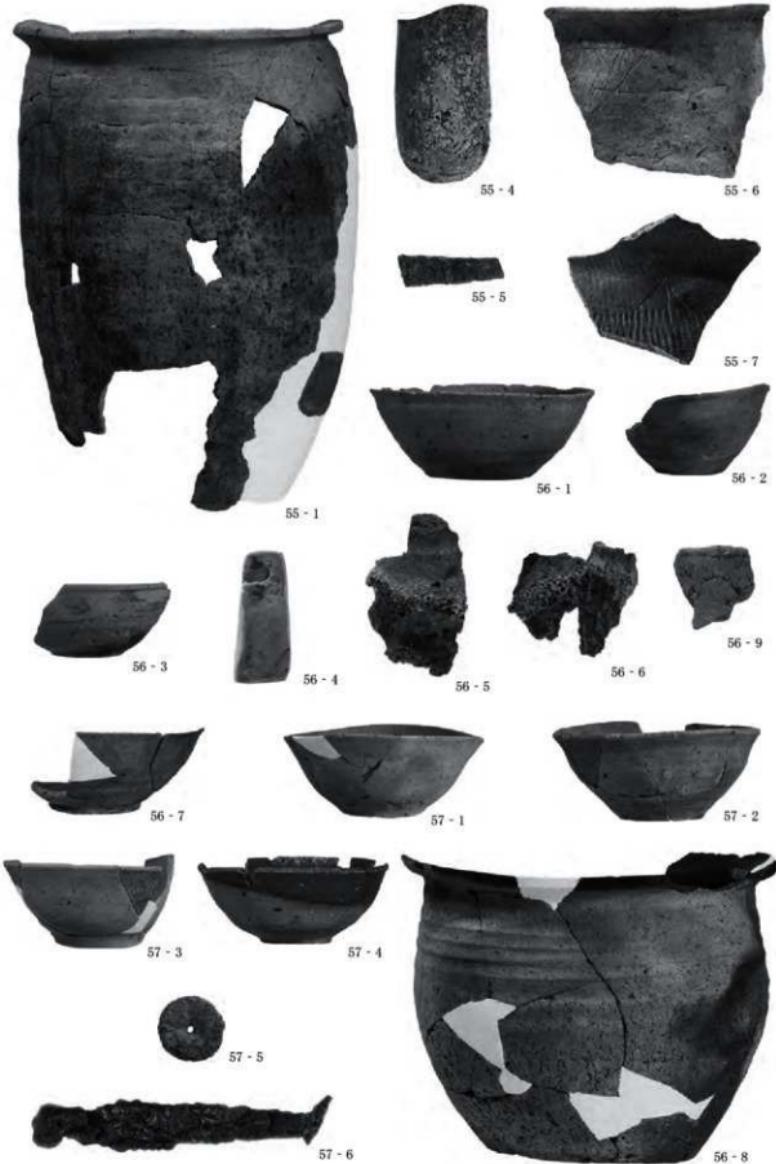
図版74 出土遺物4



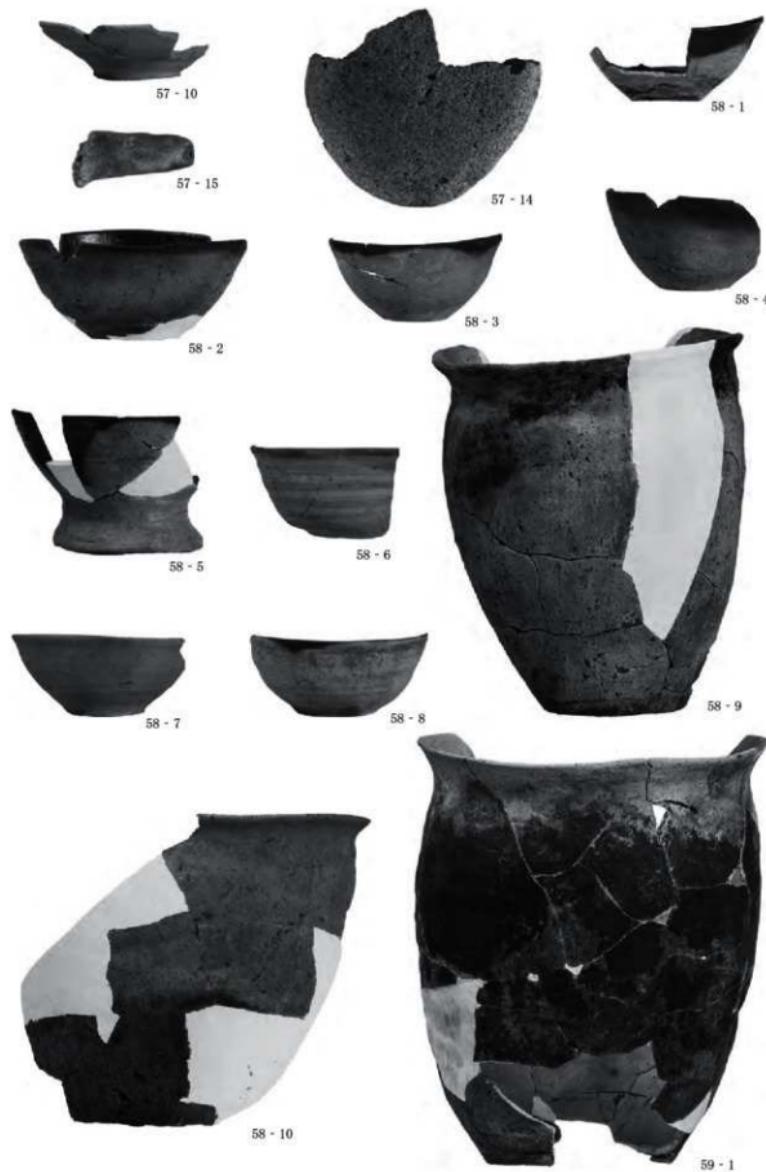
圖版75 出土遺物5



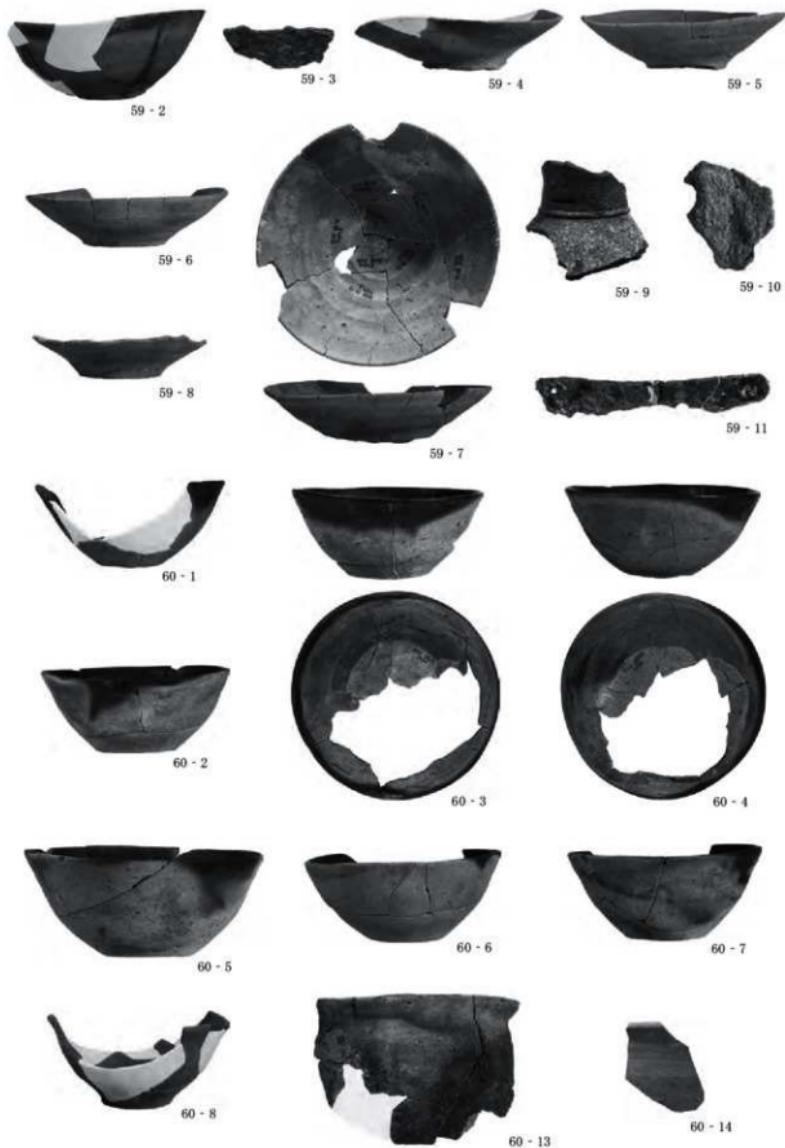
図版76 出土遺物 6



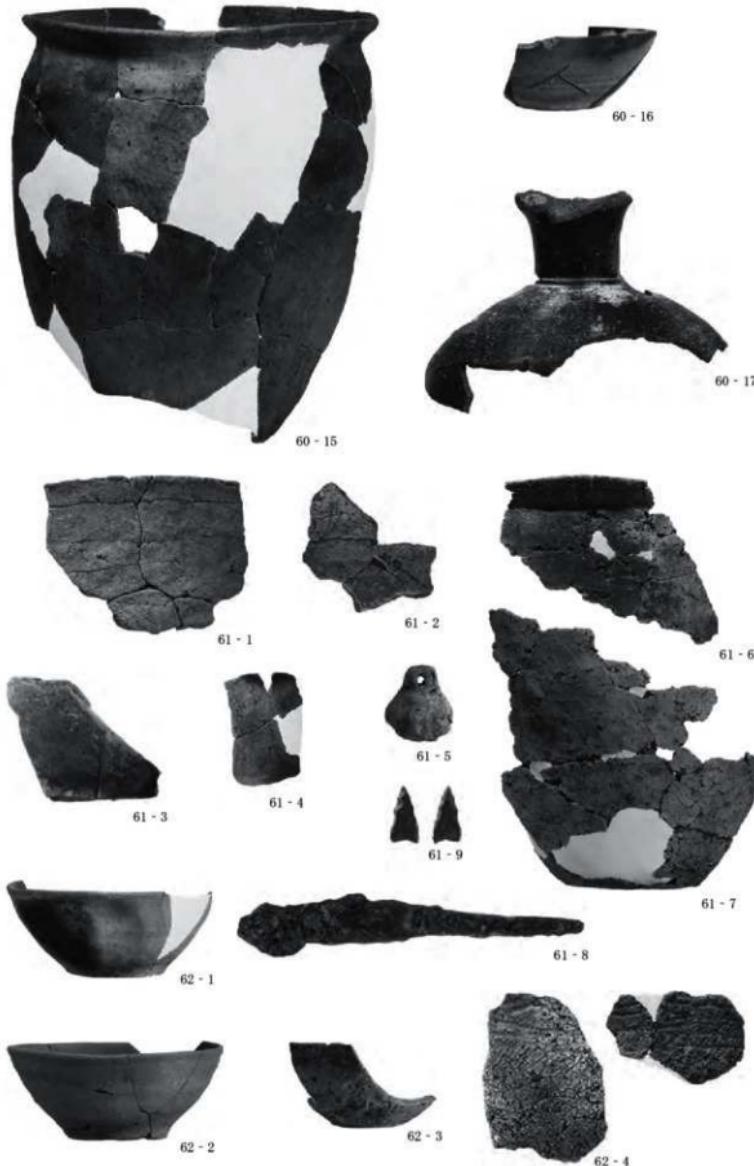
图版77 出土遗物 7



図版78 出土遺物8



圖版79 出土遺物9



図版80 出土遺物10



62 - 5



62 - 6



62 - 7



62 - 8



62 - 9



63 - 1

63 - 2



63 - 3



63 - 4



63 - 5



63 - 6

63 - 7



63 - 8



63 - 9

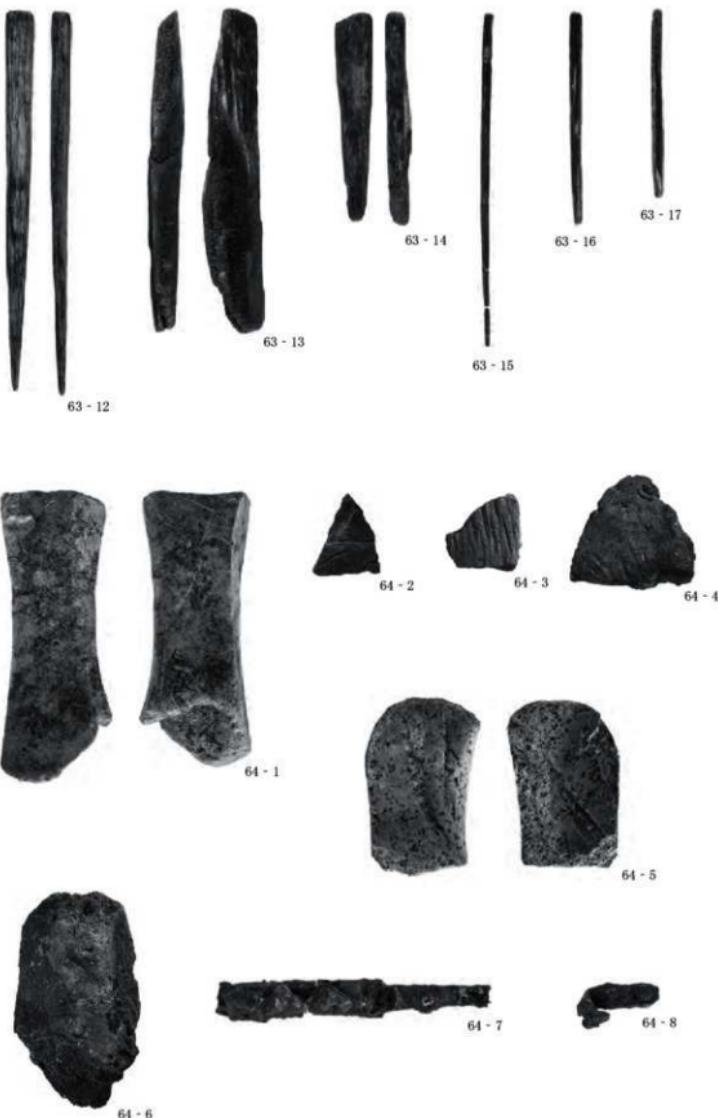


63 - 10



63 - 11

圖版81 出土遺物11



図版82 出土遺物12

写 真 図 版

上野遺跡

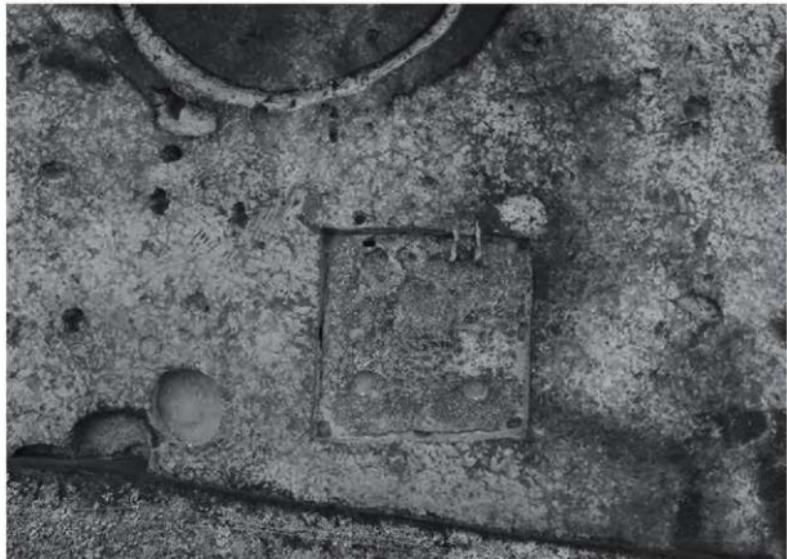


調査前 (SW→)



調査区完掘 (SW→)

写真83 調査区



S123 完掘 (上空→)



S123 完掘 (NW→)

写真84 第23号竪穴住居跡 (1)



SI23 確認面堆積状況 (NW→)



SI23 土層断面 (SW→)

写真85 第23号竪穴住居跡 (2)



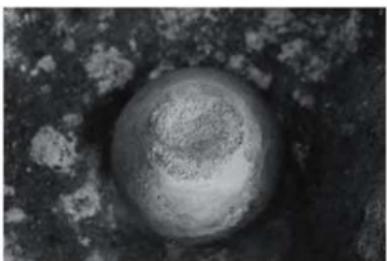
SI23 カマド確認面 (NW→)



SI23 カマド完掘 (NW→)



SI23 カマド完掘 (SW→)



SI23 カマド支脚 (NW→)



SI23 炭化物付着土器 (SE→)



SI23 炭化物付着土器 図81-7 (SE→)



SI23SB01pit6 須恵器 (NE→)



SI23 貼床除去 (NW→)

写真86 第23号竪穴住居跡 (3)



S124 完掘 (上空→)



S124 完掘 (NW→)

写真87 第24号竪穴住居跡 (1)



SI24 カマド確認面 (NW→)



SI24 カマド土層断面 (SW→)



SI24 カマド完掘 (SW→)



SI24 カマド・出入口部完掘 (NW→)

写真88 第24号竪穴住居跡 (2)



SI24 出入口部確認 (NW→)



SI24 出入口部完掘 (NW→)



SI24 出入口部SX01 (NW→)



SI24 出入口部 SX01土層断面 (SW→)



SI24 SK02埋設土器 (NW→)



SI24 SK02埋設土器 図83-6 (NW→)

写真89 第24号竪穴住居跡 (3)



SI24 SK01・SD01～03 (NW→)



SI24 内SK01土層断面 (SE→)



SI24 内SK01土層断面 (SE→)



SI24 確認面堆積状況 (NE→)

写真90 第24号竪穴住居跡 (4)



SI25 完掘 (S E→)



SI25 完掘 (S W→)

写真91 第25号竪穴住居跡 (1)



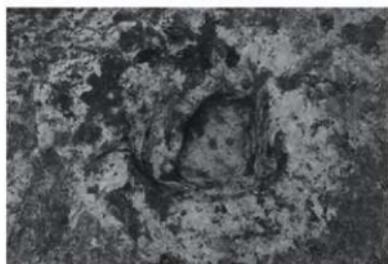
SI25 土層断面 (S→)



SI25 2層出土遺物 (S→)



SI25 2層出土遺物 (S→)



SI25 Pit1完掘 (S W→)



SI25 Pit1上層部分 (S W→)

写真92 第25号竪穴住居跡 (2)



SI25 特殊施設完掘 (S E→)



SI25 特殊施設土層断面 (S W→)

写真93 第25号竪穴住居跡 (3)



SI26 完掘 (S→)



SI26 土層断面 (S→)

写真94 第26号竪穴住居跡



SI27 完掘 (S E→)



SI27 炉土層断面 (S E→)



SI27 炉火床面3層上面 (S E→)

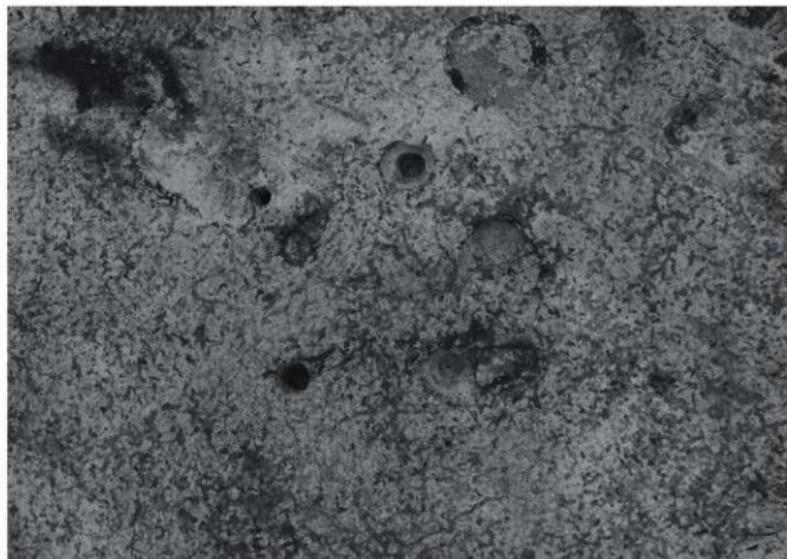


SI27 炉掘方断面 (S E→)



SI27 風倒木除去 (S E→)

写真95 第27号竪穴住居跡



SB04 (上空→)



SB04 完掘 (S W→)



SB04 完掘 (N E→)



SB04 SP19軽石出土状況 (S E→)

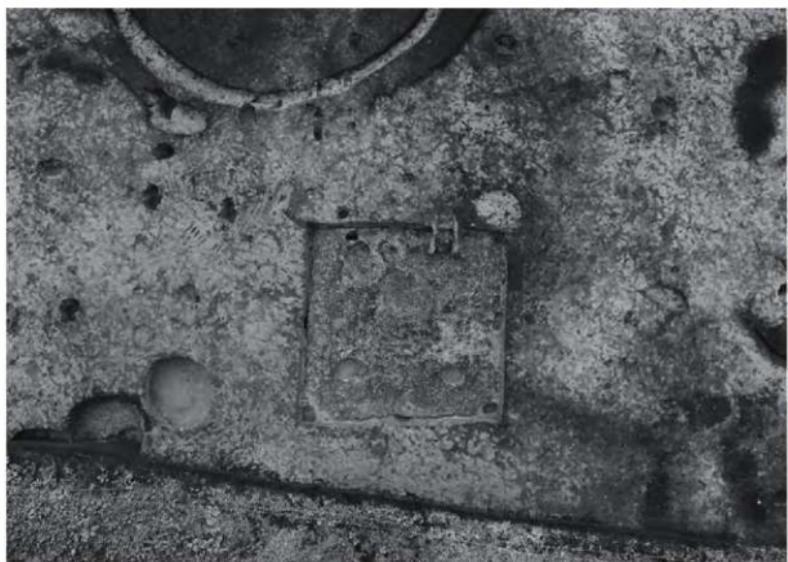


SB04 SP19軽石 図89-1 (S E→)

写真96 掘立柱建物跡 (1)



SB05 (上空→)



SB06・07およびSI23 (上空→)

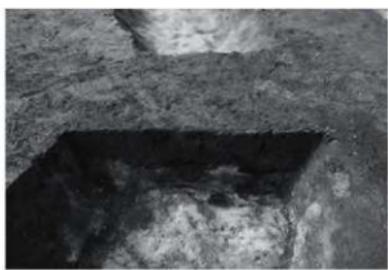
写真97 挖立柱建物跡 (2)



第2号円形周溝 完掘 (S E→)



第2号円形周溝 底面状況 (W→)



第2号円形周溝 A-A' 土層断面 (S E→)



第2号円形周溝 B-B' 土層断面 (S E→)

写真98 円形周溝



SD17 完掘 (W→)



SD17 A-A' 土層断面 (E→)



SD17 B-B' 土層断面 (E→)



SD18 完掘 (NE→)

写真99 溝跡 (1)



SD18 B-B' 土層断面 (N E→)



SD18 C-C' 土層断面 (N E→)



SD18 D-D' 土層断面 (N E→)



SD18 遺物出土状況 (N E→)



SD18 遺物出土状況 図89-5 (E→)

写真100 溝跡 (2)



SD19 2層下部遺物出土状況 (S E→)



SD19 2層下部遺物出土状況 (S E→)

写真101 溝跡 (3)



SK18 完掘 (NW→)



SK18 土層断面 (NW→)



SK20 完掘 (SE→)



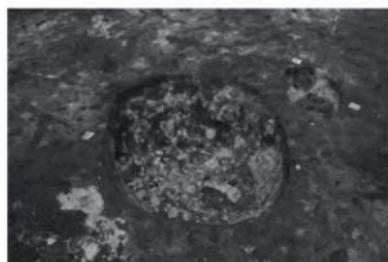
SK20 土層断面 (SW→)



SK21 土層断面 (SE→)



SK22 土層断面 (SE→)

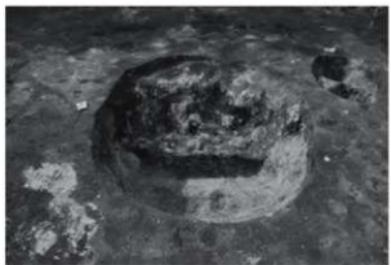


SK23 完掘 (SE→)



SK23 挖方 (S→)

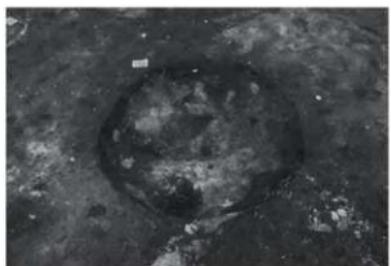
写真102 土坑 (1)



SK23 底面上土層断面 (S E→)



SK23 土層断面 (S E→)



SK24 完掘 (E→)



SK24 土層断面 (E→)



SK25 完掘 (NW→)

写真103 土坑 (2)



SK25 土層断面 (NW→)



SK25 貼床除去 (NW→)



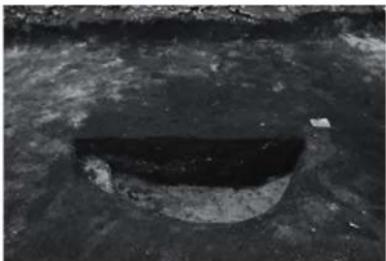
SK25 土玉 図90-7 (S E→)



SK26 土層断面 (S→)



SK28 完掘 (E→)



SK28 土層断面 (S E→)



SK29 完掘・掘方埋土層 (N E→)



SK29 土層断面 (N E→)

写真104 土坑 (3)

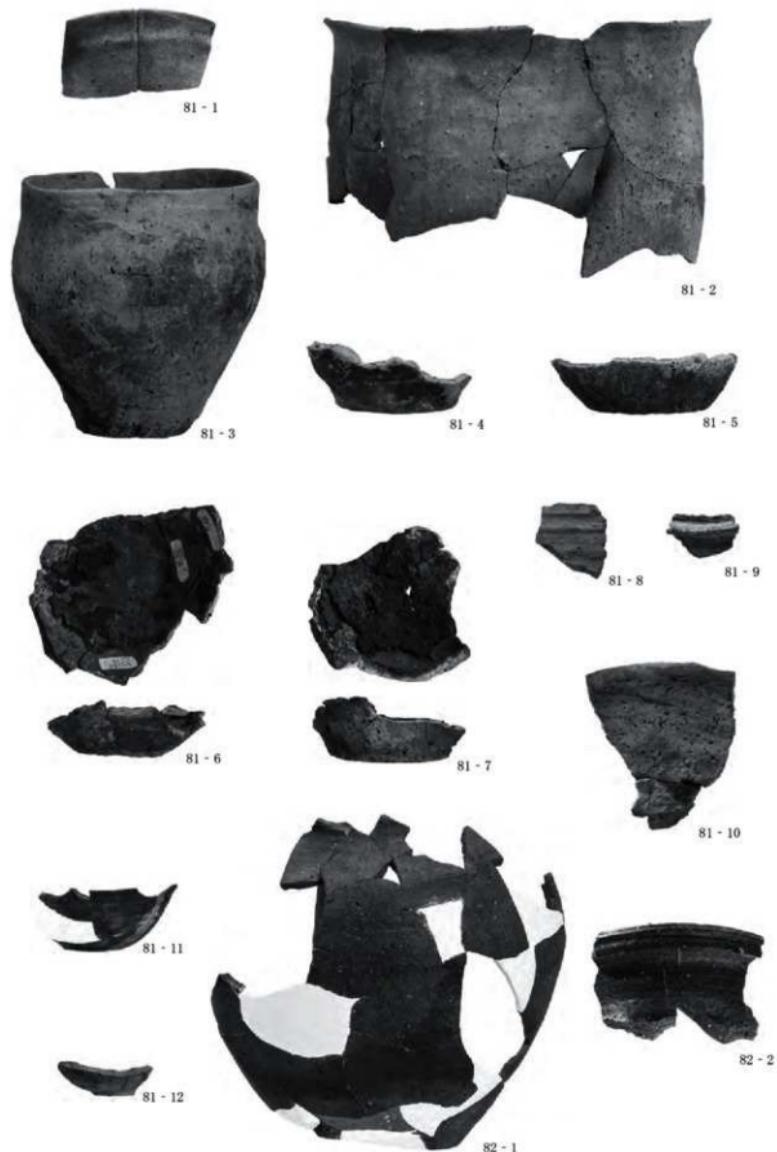


IP-25 ガラス玉・出土状況 (NE→)

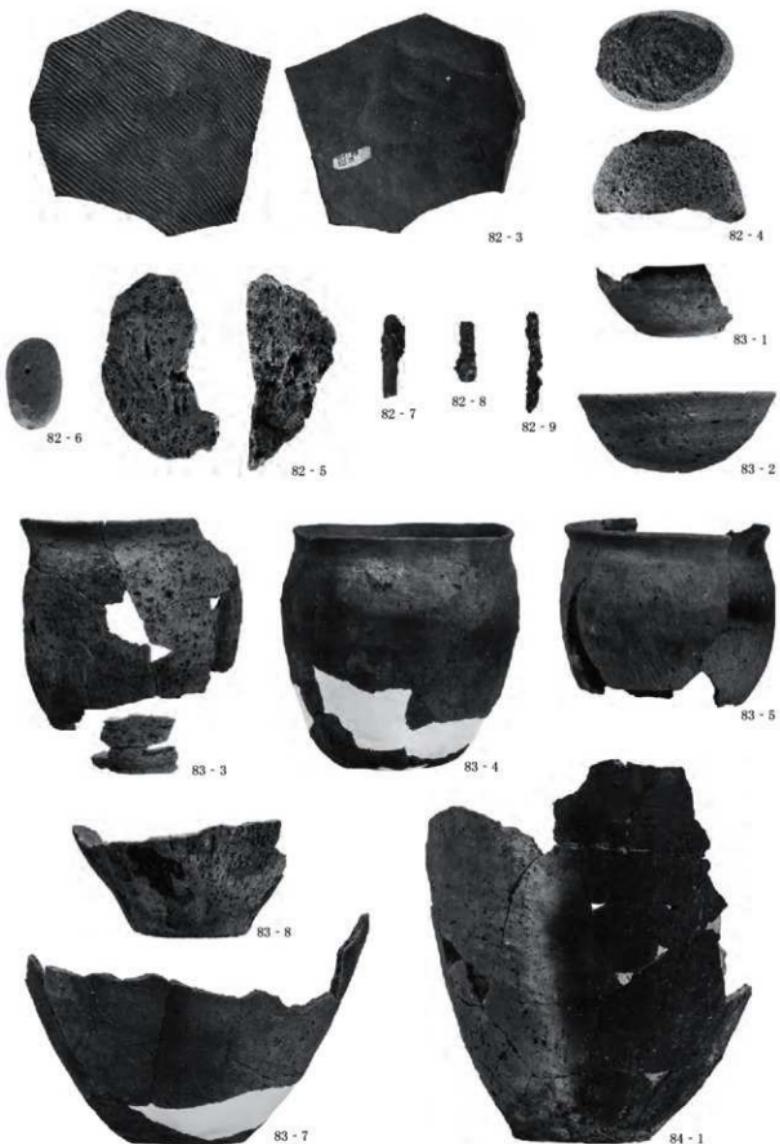


SI24 作業風景 (S→)

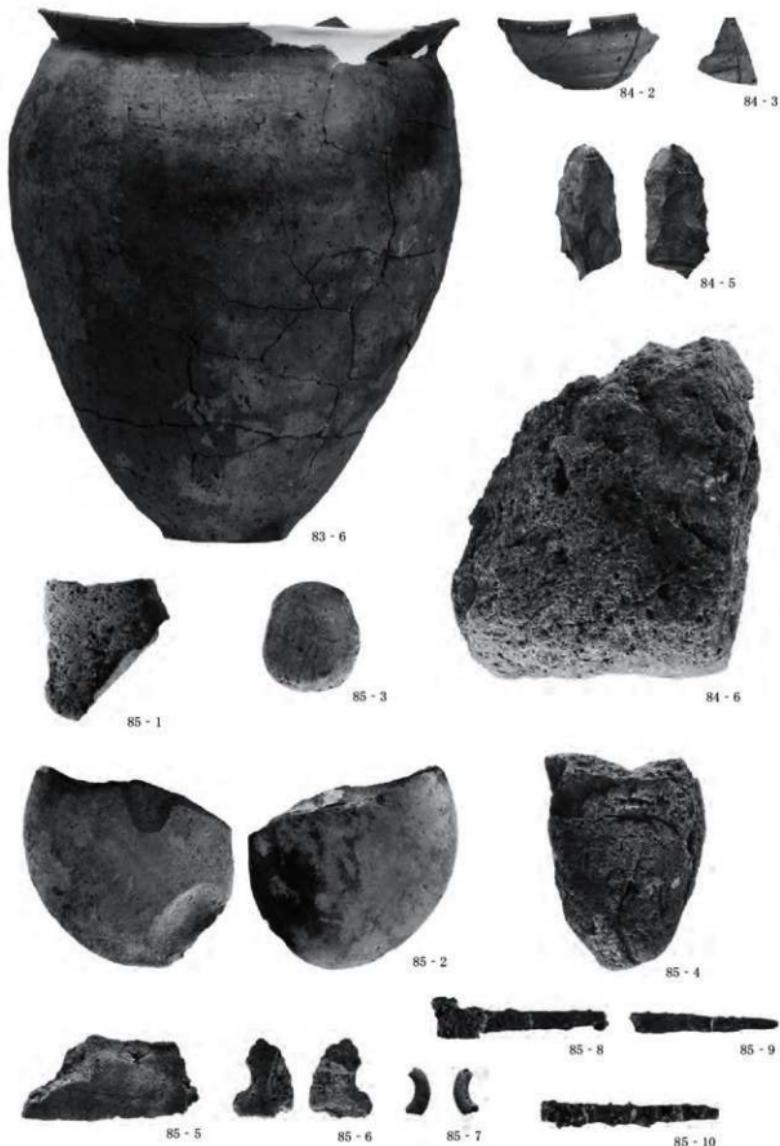
写真105 ガラス玉出土状況・作業風景



図版106 出土遺物1



図版107 出土遺物2



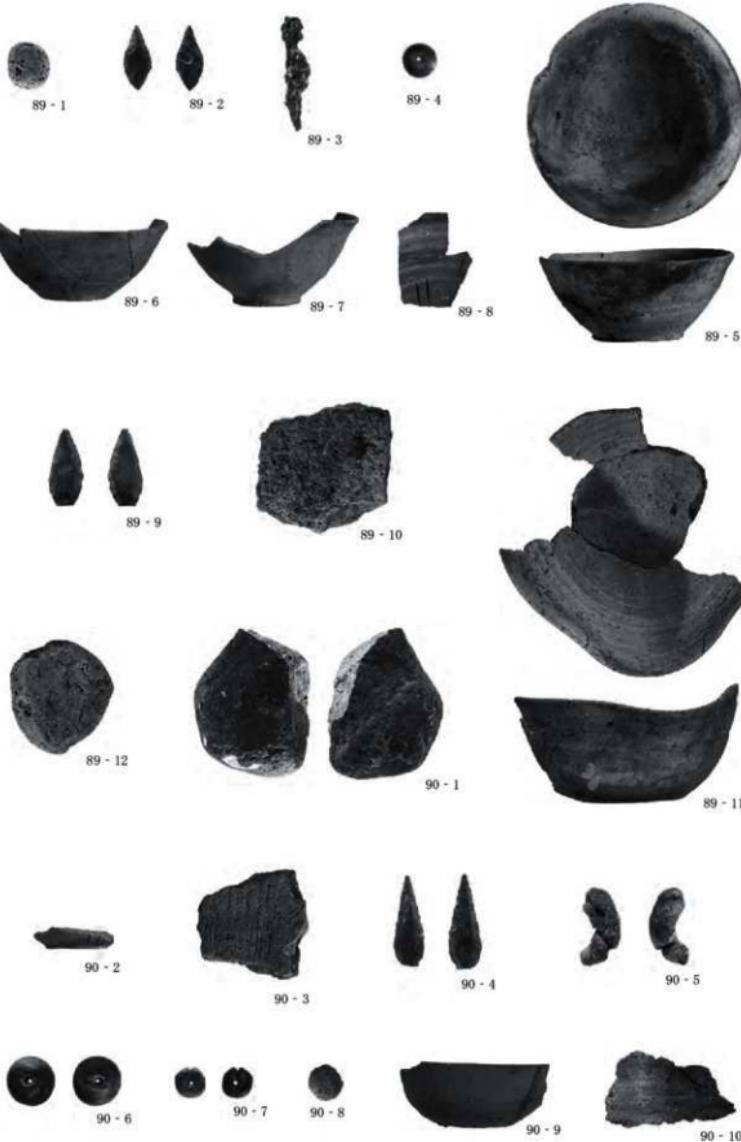
図版108 出土遺物3



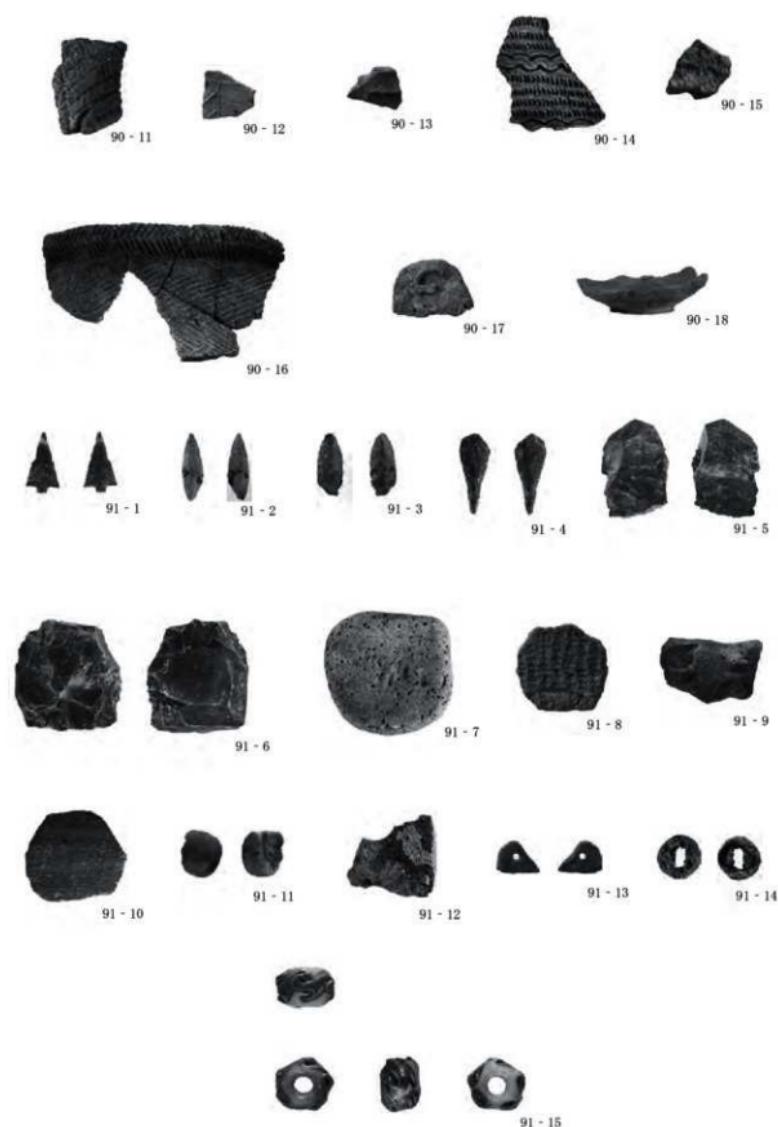
図版109 出土遺物4



図版110 出土遺物5



図版111 出土遺物6



写 真 図 版

郷山前村元遺跡



円形周溝群 検出・確認 (N E →)



第1号円形周溝 検出確認 (S E →)

写真113 円形周溝群・第1号円形周溝 (1)



第1号円形周溝 完掘 (S E→)



第1号円形周溝 掘方 (S E→)

写真114 第1号円形周溝 (2)



SD02 土層断面 (N E→)



SD03 土層断面 (S E→)



SD04 底面・土層断面 (S W→)



SD05 土層断面 (N W→)



SD06 土層断面 (S W→)



SD07 土層断面 (N W→)



SD06・07 完掘 (N W→)



SD06 挖方 (N W→)

写真115 第1号円形周溝(3)・第2号円形周溝



SD08 完掘 (N E→)



SD08 挖方 (N E→)

写真116 第3号円形周溝 (1)



SD08 挖方 (S W→)



SD08 A-A' 土層断面 (N E→)



SD08 B-B' 土層断面 (S W→)



SD08 C-C' 土層断面 (W→)



SD08 B-B' 付近B-Tm堆積状況 (S W→)

写真117 第3号円形周溝 (2)



SD08 B-B'付近B-Tm堆積状況 (N E→)



SD08・SD11 (N E→)



SD08 A-A'付近底面 (N E→)



SD08 規模・掘方 (S W→)



SD10 掘方 (S E→)



SD10 土層断面 (W→)



SD11 完掘 (N E→)



SD11 土層断面 (S W→)

写真118 第3号円形周溝 (3)



第4号円形周溝 完掘 (S E→)

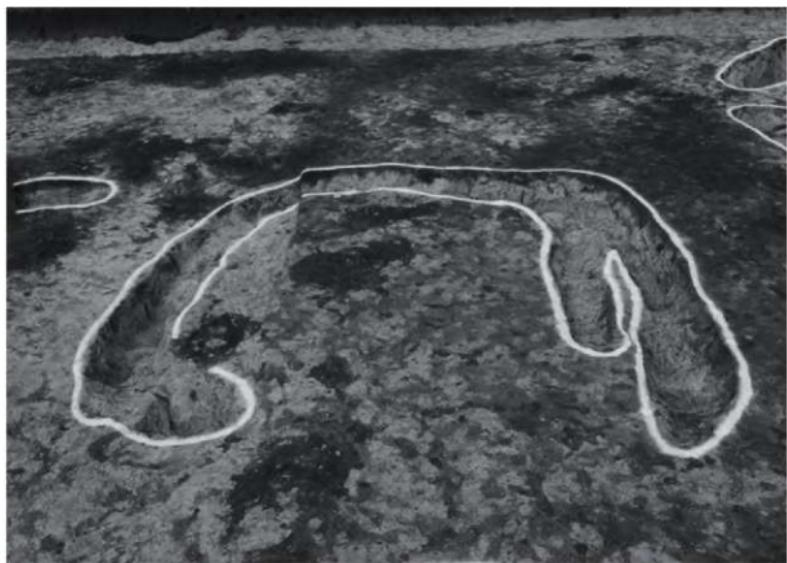


第4号円形周溝 掘方 (S E→)

写真119 第4号円形周溝 (1)



SD15 完掘 (S E→)

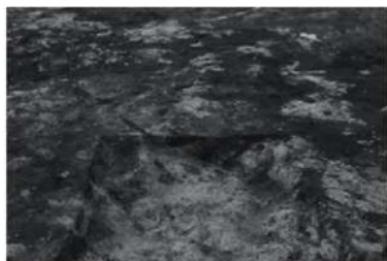


SD15 挖方 (S E→)

写真120 第4号円形周溝 (2)



SD15 重複・完掘 (NW→)



SD12 土層断面 (N→)



SD13 土層断面 (S E→)



SD14 土層断面 (N E→)

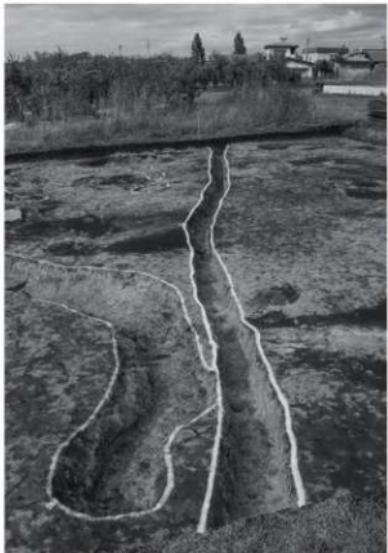


SD15 土層断面 (W→)

写真121 第4号円形周溝 (3)



SD01 底面 (S→)



SD01 挖方 (S→)



SD01 底面 (N→)



SD01 B-B' 土層断面 (S→)



SD01 A-A' 土層断面 (S→)



SD01 C-C' 土層断面 (N→)

写真122 溝跡 (1)



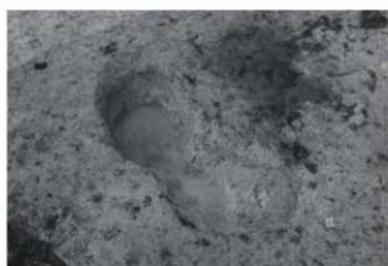
SD16・17 完掘 (N→)



SD16・17 土層断面 (N→)



SD16・17 完掘 (S→)



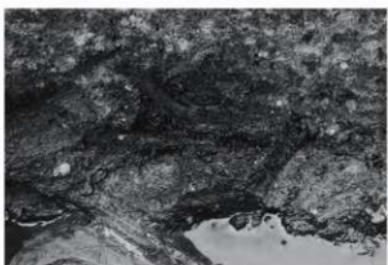
SK01・02 完掘 (S→)



SK01・02 土層断面 (S W→)



SK01 遺物出土状況 (S→)



SK01 キビ塊出土状況 (N E→)

写真123 溝跡(2)・土坑



図版124 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	くまさわためいけいせき。うえのいせきさん、ごうさんまえむらもといせき							
書名	熊沢溜池遺跡・上野遺跡Ⅲ・郷山前村元遺跡							
副書名	県道常海橋銀線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第591集							
編著者名	佐藤智生、藤原有希							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2018年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2011)	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯 東経				
熊沢溜池遺跡	青森県青森市浪岡大字吉野田字熊沢地内	02201	201336	40° 71' 72"	140° 55' 78"	20150804～ 20151028 20160419～ 20161026	4,400	記録保存調査
上野遺跡	青森県青森市浪岡大字郷山前字上野地内	02201	201338	40° 71' 49"	140° 55' 45"	20160419～ 20161026	2,200	記録保存調査
郷山前村元遺跡	青森県青森市浪岡大字郷山前字元村地内	02201	201398	40° 71' 39"	140° 55' 28"	20160419～ 20161026	2,600	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
熊沢溜池遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器・石器	・縄文時代の散布地を検出した。 ・平安時代の集落跡を検出した。			
	集落	平安時代	堅穴建物跡	25				土師器
			塙跡	4				須恵器
			掘立柱建物跡	4				石器(砥石・台石・敲石)
			溝跡	25				土製品(土玉・土鉢・紡錘車・
			土坑	37				羽口1等)
			井戸跡	2				木製品
			柱穴	88				鉄製品 製塩土器 炉壁・焼成粘土塊 陶磁器
上野遺跡	散布地	近世			・縄文時代の集落跡を検出した。 ・平安時代の集落跡を検出した。			
	集落	縄文時代	堅穴建物跡	3				縄文土器・石器
			掘立柱建物跡	2				
			堅穴建物跡	2				土師器
			溝跡	3				須恵器
			円形周溝	1				石器(砥石・金床石)
			土坑	10				土製品(土玉・紡錘車・羽口等)
柱穴	12	鉄製品 製塩土器 ガラス製品						

郷山前村元遺跡	散布地 集落跡	縄文時代 平安時代	円形周溝 溝跡 土坑	3 16 2	縄文土器 土師器 須恵器 土製品（羽口） 鉄製品 炭化種実塊	・縄文時代の散布地及び 平安時代の集落跡を検出 した。
要 約	<p>熊沢溜池遺跡は白頭山苦小牧火山灰降下以後を中心とする平安時代の集落跡である。外周溝をもつ堅穴建物跡が確認され、溝で区画された集落の様相が明らかになった。堅穴建物跡の主軸方位から、3段階の変遷が推察される。新段階のSK28からは多数の黒色処理された土師器が出土した。特に体部から底部にかけて破損しているものや、破片あるいは細片の出土が多い。表面が剥落していることから、故意に破壊を行い、廃棄した可能性が考えられる。また、溝跡等から精錐が炉壁が出土し、炉の構造を考察する上での重要な資料である。炭化穀物塊は調理方法の一端を示す資料として活用が期待される。</p> <p>上野遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡である。これまでに平成18年、平成20年の2回調査が行われている。今回、縄文時代では早期・前期・中期の土器が出土した。中期の円筒上層e式期から桜林式期にかけての堅穴建物跡が検出され、浪岡地区における当該期の集落が初めて確認された。平安時代は、これまでの調査とあわせて、白頭山苦小牧火山灰降下以後を中心とする。大溝・中溝に区画された堅穴建物跡の主軸方位から、3段階の変遷が推察され、最終的に円形周溝が築かれる。</p> <p>郷山前村元遺跡からは平安時代中期の円形周溝、溝状遺構、土坑を検出した。円形周溝は白頭山苦小牧火山灰降下前後の構築・廃絶を示す。土坑からは炭化種実塊が出土した。種実塊からはキビ、アワ、イネ、アサ、ソバが確認され、当時の食生活を考察する上で重要な資料である。</p>					

青森県埋蔵文化財調査報告書 第591集

熊沢溜池遺跡
上野遺跡Ⅲ
郷山前村元遺跡

-県道常海橋銀線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告-

発行年月日 2018年3月23日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 協同印刷工業株式会社
〒035-0041 青森県むつ市金曲1-15-8
TEL 0175-22-2231 FAX 0175-22-0435
